

# 言語・認識・創造性\*

葛 西 清 蔵

## 序 章

福井 (2001 : 196) は「日本における理論言語学の教育および研究はかなり危機的状态にある」という。また、最近の『英文学研究』(第75巻第2号)の中で、懸賞論文の英語学の分野に該当者がいないことに触れ、選考者は「先行研究・関連分野への不十分な理解」が大きな理由であることをのべている。これは、すでになされた研究や、明白に関係あると思われる研究が正当に評価されず、素直に後の研究にいかされていかないことを示している。英語学の研究には、基本的なところで欠けているものがあるのではないかと危惧される。

この英語学の世界にみられる傾向は、他の分野にも世界にもみられるようである。丸山 (1961 : 6,7) は、日本の思想の学問上の論争について、

「日本の論争は多くはこれだけの問題の解明もしくは整理され、これから先の問題が残されているというけじめがいつこうにはつきりしないまま立ち消えになってゆく。そこでずっと後になって、何かのきっかけで実質的に同じテーマについて論争が始まると、前の論争の到達点から出発しないで、すべてそのたびごとにイロハから始まる……『思惟の経済』の点でもはなはだ無駄なことが少なくない」 (下線引用者)

と、日本の思想問題は、けじめがはつきりせず、無駄が多いことを嘆いている。これは、まさしく英語学の世界にもあてはまる。であるとすれば、どのように

して、これを避けることができるだろうか。日本の思想について、久野・鶴見 (1956:i) は、

「現実にはたらきかけ、現実を動かした日本の代表的思想流派の仕事をちゃんと評価しなければ、日本の思想の足どりをしっかりさせることはできない。これまでの日本の思想は、フラフラした千鳥あしをまぬかれていない」

(下線引用者)

とのべているところをみると、英語学についてみられた傾向は、実は、日本の思想そのものの傾向であり、過去の成果を無駄にすることなく、つぎの研究の土台として、積みあげていくためには、過去の「仕事をちゃんと評価」することから、はじめなくてはならない、ということになる。<sup>(1)</sup>

本稿の目的は、英語学でも、過去のそれぞれの研究の「はじめをはっきりさせる」ために、①これまで提案されてきた、いくつかの文法規則をみなおし、②言語における「創造性」を検討しなおすことである。前者では、ゲシュタルト (gestalt) 心理学から、変形生成文法の規則を検討することになり、後者では、Chomsky の言語理論で重要な用語である言語の「創造性」の位置付けを明確にすることになる。これらの二点について、「ちゃんと評価」しておくことが、今後の研究成果の積み上げにつながると思うからである。

## 第1章 認識と言語 — よい gestalt と文法

The language, a certain cognitive system, a system of knowledge incorporated in the mind/brain. (Chomsky 1988 a : 10)

0. 言語はすぐれて認識的なものである。「言語はすべて認識過程を通して知覚され、表現される」(三浦 1967 : 438)。この言語と認識の関連性のつよさはさまざまな形で認められる。音、文字などは、聴覚的、視覚的な知覚を通して、それが指示する内容が認識される。この過程をぬきにしては言語は成立しない。最近、この認識という観点から言語をとらえようとする研究がめだつ。認知言語学がそれであるが、事実上、絶命した (Chomsky 1982 : 4) といわれる「生成意味論」(generative semantics)、また「成層文法」(stratificational grammar) などもそうであろう。(成層文法では、小さな意味単位を「認識素」<sup>(1)</sup> (gnosteme) とよんだ)。言語は「小さな単位の集まりとみられ、認識は多数のお互いに独立な、しかもそれ以上に細かく分けることのできない、最小の要素から成り立っている」(岩崎ほか 1968 : 199) と考える。この点で、こういう見方は論理原子論である。

ここで論じようとしていることは、認識を中心にしてはいるが、上記のものとは性質を異にする。上であげた理論は、言語を、認識がどう成立するかとの関係でとらえようとするが、ここでは、

- ①人間の認識はどんな性質をもつか、
- ②その性質は、言語にどのような形でみられるか、

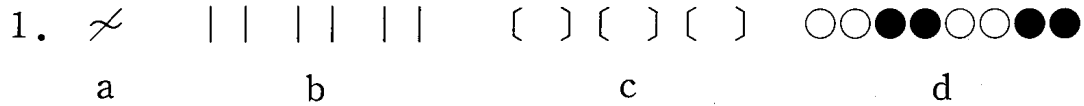
という点から言語を考えてみようとする。「部分はその全体における他の部分との相互的交渉によって規定される」(中村(克) 1960 : 298) と考える点において、本論は非アリストテレス的思考法をとるものである。つまり、単に「与え

られた全体を要素から合成される複合体とみなす」原子論よりも、それ以上のものとみなす全体論をとる。

1. ここでは、まず、われわれの認識はそもそもどんな性質をもっているか、をゲシュタルト (gestalt) 心理学の観点からみることにする。gestalt 心理学では、「要素はあるゲシュタルトの部分となすことによって始めて意味をもつ」(藤永 1971 : 31) ものであるからであり、「ゲシュタルト心理学の理論構成は非アリストテレス的思考法にもとづく」(中村(克) 1960 : 296) ものだからである。つまり、文の意味は「各構成単位のもつ意味をそれらの結合様式との関係」(Alston 1968 : 107) であることはまちがいない。gestaltと言語との関係については、すでに Lakoff, G. (1979)、Talmy (1975)、Wallace (1982)、Reinhart (1984) などのいくつかの論文がある。これらはいずれも gestalt のなかで、どの部分が figure、ground となるかを、文法との関係でさまざまな分野について論じたものである。本章はこれらとはちがひ、「よい gestalt」が英語の文法にどのように関わっているかをみながら、認識の仕方を言語との関係の深さを見ようとする。

「認識」(cognition) とは、ラテン語 co (=together, entirely) と gnoscere (=to know) からなり、「ある対象について、これを知覚し、全体的に知ること」である。「認識ということは、絶対の認識ではなくて、関係を見る」ことであり、「物があるのではなくて、関係によって物があらわれてくる」(川本 1986 : 55,56) のである。この際、対象は gestalt という形で知覚される。これは形としては「もっとも安定した、最終的平衡に達した状態」(山崎・市川 1986 : 207) である。これが「よい gestalt」、「優位な gestalt」であるが、この gestalt は、「規則的であり、単純であり、相称的」(ギョーム 1966 : 49) である。また、gestalt が成立する要因は、近接しているものはもとまりやすい(『近接の要因』(factor of proximity)、一定の方向へむかう単純なものはもとまりやすい(『よい連続の要因』(factor of good continuity)、閉じたものはもとまりやすい(『閉合の要因』(factor of closure)、似たものはもとまりやすい(『類似の要因』(factor

of similarity) などがある。つぎの図をみよう。



(1a) は～と／から成るが、一定の方向をもつものの集まりが最も単純な知覚である。可能性としては、～と／の組み合わせでもよいはずである。(1b) は接近した|| どうしがまとまりをなすと知覚される。(1c) では、(1b) で離れていたものを閉じた形にすると、閉じたものどうしがまとまりをつくる。(1d) ではおなじ色のものがまとまりをなすことを示す。

これは視覚的なものであるが、重要なことは、この傾向は「精神は……常に多様なものの統一的、単一的な把握の傾向がある」(泉井 1976 : 327) のであって、視覚にかぎるものではない、ということである。

2. a thought, perception, the emotion, cognitive processing, motor activity and language are all organized in terms of the same kinds of structures, which I am calling gestalt

(Lakoff 1979) (下線引用者)

b We perceive the world around us in this manner.

(Chomsky 1988 b) (下線引用者)

(2b) で in this manner とは、gestalt のことである。つまり、われわれの言語も認識もこのように「よい連続」、「近接」、「閉鎖」、「類似」など、できるだけ「安定した」形で把握する傾向があることをまず確認しておこう。

ことばが要素とその関係から成っていることからすると、文法は、結局は、四つの「要因」が、この要素の関係のしかたにどのように関わっているかをみればよいことになる。

## 2. 単純さ

2.1 われわれの認識がもつこれら四つの要因は、具体的に英語ではどんなあらわれ方をするのであろうか。それぞれの「要因」の検討の前に、まず認識のし方は、全体として「単純さ」を指向することから見ることにしよう。

まず、サピア (Sapir) のつぎの言葉をみよう。「すべての言語が本来、表現の節約に向かう傾向を有しているのである。もしもこの傾向が全然作用しないとすれば、文法というものは存在しないであろう」(1949:38)。文法のない言語というものはありえないが、この文法こそ言語のもつ節約の傾向が集約したものであるとする。ありうる節約の傾向とは、単純化といいかえることができるであろう。すべての言語表現の中に共通に見られる規則性こそ文法であるはずであり、すぐれた文法規則とは、単純なもののはずだからである。例外の多い文法規則はすぐれた文法規則とはいえない。「もともと法則というものは、一般性、無矛盾性とともな簡潔さが重要」(沢田 1967:157)なのである。

文法規則をささえる原理をさぐる文法理論というのはさまざまありうる。しかし、どんな方法で説明を試みようか、その方法、原理とは関係なく、言語があるかぎり、そこには単純さに対するつよい傾向が働いている文法があるはずである。Chomsky は「最小の労力の原理」として、つぎのようにいう。「この原理は明らかに言語能力に固有のものである……それは表示にも余分の記号が存在してはいけないと特別に明記することになる」(1990:37)。「ある理論が……個別文法に「余りにも事項が多すぎる」ことを要求するならば、それは誤った理論であると結論できる」(1990:38)のである。

このいい方はおおむね正当なものであろう。しかし、「言語能力に固有なものである」というのは、すでにみたところからも明らかなように、正確ではない。できるだけ少ない記号を使う表示でなくてはならない、可能なかぎり簡潔なものであるべきだ、ということは正当である。これは表示の仕方についてのべたものであるが、彼はこの原理を「経済性」(economy)とよんでいる。

「経済性」を重視する具体的な例として、マルチネ (Martinet, A.) をあげなくてはならない。彼の 'la loi du moindre effort' とは、まさしく「最小努力の法則」である。

3. *tendance à réduire au minimum son actualité mentale et physique ... le comportement humain est soumis à la loi du moindre effort.*

(1967 : 176)

精神的、肉体的活動を最小にする傾向がある、と「肉体的な」活動も含めていることに注目しておく。つぎに、人間の活動は、最小努力の法則に支配されている、とはっきりのべており、これは Chomsky に並行するものであることは明白である。そして、「二重分節」(double articulation)こそ、その一つの現われであるという。

4. *La première articulation est la façon dont s'ordonne l'expérience commune à tous les membres d'une communauté linguistique déterminée.*

(1967 : 14)

つまり、第一分節とは、言語社会のメンバーに共通な経験に組み立てているその方法のことであり、第二分節とは、たとえば、tête の場合には、その単位は三つで、t、e、tのように、第一分節でとりだされた単位を音素に表記することである。

この二重分節の利点は「経済性」であって、それぞれについて、つぎのようにのべる。

5. *The first articulation was economical in the sense that with a few thousands of fairly unspecific monemes, it was possible to shape an infinity of different communication. In the same way, the second*

articulation is economical, since the judicious combination of a few dozen phonemes enables man to keep all the monemes he needs.

(1962 : 24) (下線引用者)

数千の moneme (記号素=意味をもつ最小の単位: 例 dormira は、dorm-ir-a の三つの記号素からなる。dorm : dream、ir : 未来、a : 三人称・単数) があれば、無限の伝達が可能になる、という点で、第一分節は経済的であり、数十の音素があれば、必要なすべての記号素を区別できる、という点で第二分節という考えは経済的である。<sup>(2)</sup>

経済的であるという意味で、二重分節は、「人間言語の特徴」(a feature of human language) (1962 : 24) である。

言語と認識の関係はきわめて密なものである。言語は現実には、無駄が少なく、経済的にできている。これは、ほかならぬわれわれの認識そのものが簡潔さ、単純さを求めることの反映である。つまり、言語そのものは全体として無駄が少なく、人間の認識のし方に合ったようにできている、ということである。これは、むしろ当然で、人間に最も特徴的な言語が、人間の認識力に反するような性質のものであるはずがない。まさに、「複雑さのなかに簡単を見る」ことが知覚の出発点」(渡辺 1978 : 7) ですらある。Chomsky (1957 : 56) はつぎのようにいっている。

6. It is when we find that simplification of one part of the grammar leads to corresponding simplification of other parts that we feel that we are really on the right track.

ある説明が正しいと思えるのは、文法の簡潔さがその部分ばかりではなく、ほかの部分の簡潔さと関連したものであるときである、というのである。

3. 2. では、言語を最も大きく支配していると思われるの「単純さ」について



みた。つぎには、英語にどのように反映されているかを、四つの要因、『近接の要因』、『よい連続の要因』、『閉合の要因』、『類似の要因』について、順次見ていくことにする。まず、『近接の要因』からはじめよう。

### 3.1 『近接の要因』

文法関係を語順にたよることの多い英語においては、修飾関係など「意味的に関係のふかいものを、近くにおく」ことをまず、この例としてあげてよい。furiously barking dogs で、furiously は barking を、barking は dogs を、それぞれ修飾する。目的語と動詞の関係についても、目的語は動詞を修飾する(細江 1917: 52) と考えうることを、この例としてもよいであろう。動詞を下位範疇化する補部は、動詞の近くにくるが、動詞を下位範疇化しない付加語(adjunct) は補部のさらに次にくることも多く、文頭への移動も補部容易である。付加語は動詞との関係が薄いからである。

3.1.1 動詞と主語の「一致」についても、このような関係はみられると思われる。

7. a Each of us have decided to discontinue our memberships.
- b Seventeen years of experience in using audiovisual equipment...  
has conclusively proven the value.

のような例にみられるいわゆる「牽引」(attraction) の例も結局は、近くのものに引きづられる現象で、「近さ」の影響であり、「近接の呼応」(concord of proximity, proximal concord) (Declerck 1991: 237) である。

8. a Not only arms and arts, but man himself has yielded to the pen.
- b A person or persons were after the documents.

(8 a, b) いずれも動詞、has、were は直前の名詞の「数」に合わせている。  
(9) の例でも同様である。

9. a There are two dogs and a girl in the room.  
b There is a girl and two dogs in the room.  
c ?There are a girl and two dogs in the room.

(Celce-Murcia and Larson-Freeman 1983)

- d There's a school and a hospital in Roxbury.  
e?\*There are a school and a hospital in Roxbury.

(Milsark 1979)

### 3.1.2 つぎに「格」についてみよう。

It's me. の me が、「論理的に正しい」'I' となっていないことについては、以前からいくつかの説明方法がある(仏語 C'est moi. の moi の影響。It's he/she. の [i:] の影響など。)が、動詞の後には、語順の圧力によって、(他動詞であれ、自動詞であれ)目的語の area である(Fries 1964 : 90, 91) (ex. to dream a strange dream) ことは確かである。

10. a I hate John's/his coming so often.  
b I hate John/him coming so often.

の (10 a, b) が許容されるのも、動詞のあとに目的語を要求するということからきていると考えられる。これも動詞に対する近さのためであり、「語順の圧力」(the pressure of word order pattern) (Fries 1964 : 91) といつてよい。

11. I will invite whomever (= whoever = anyone who) wants to come.

などの「関係詞牽引」(relative attraction) もこの例である。

12. a the people and things which amuse her most  
b the things and people who amuse her most

(Quirk et al. 1985 : 1246)

関係詞 which、who をすぐ前の名詞に合わせてある。これはまさしく「近接の原則」(principle of proximity) (Celce-Murcia and Larson-Freeman 1983: 68, Quirk et al. 1985 : 757) と呼ばれているものである。

3.1.3 最後に、つぎのような「否定牽引」(negative attraction) の例も加えておこう。

13. I don't complain of your words, but of the tone in which they were uttered.

この例では、本来、I complain, not of..., but of ... であるべきもの、つまり語否定のものが、否定語が動詞にひかれて、文否定の形をとったものである。動詞は否定辞をひきつけやすいのである。(ここで「否定辞繰り上げ」(NEG-raising) を思い起こしてもよい。)

3.2 つぎに、Chomsky の理論で、「近さ」がどのような形で関わっているかをみることにしよう。

### 3.2.1 「コントロール理論」

14. John persuaded Mary<sub>i</sub> [PRO<sub>i</sub> to go]

補文の PRO が何を指すかについては、「PRO は、いちばん近い主語目的語をコントローラーとする」というきまりがある。<sup>(3)</sup>

3.2.2 「境界理論」「下接の条件では、 $\alpha$  移動は二つ以上の境界節点をこえて移動してはならない」。

15. \* $[_s \text{ which race}_i [_s \text{ did John believe } [_{NP} \text{ the claim } [_{s_2} \text{ that } [_s \text{ Mary had won } t_i]]]]]$

すでに触れたように、重要な機能を語順にまかせている英語では、要素の移動ということには、厳しい制限があり、要素を自由に移動させることはできない。移動できたとしても、ごく近いところにしかできないが、この移動を二度もくりかえすことは決して許されない。(これは要素どうしのまとまりの固さ、つまり構成要素をなすかどうか、とも関係するが、これについては後でふれる。)

3.2.3 「格理論」隣接条件：「AがBに格を付与するためには、AとBが隣接していなくてはならない」

16. a \*We want very much [John to be there]  
 b We very much want [John to be there]  
 c We want very much [for John to be there]

すべての名詞は格をもたなくてはいけないが、それは、普通、動詞・前置詞によって与えられる。上の非文は、wantのあとにvery muchがあり、wantとJohnが隣接していないので、Johnに格が与えられないことになる。forがあれば、この前置詞によってJohnは格が与えられ、許容される文となる。

3.2.4 「 $\theta$ 理論」「 $\theta$ 役割を付与する要素と、その役割を受ける要素との間に構造上の関係は、極めてせまく規定され、局所的である」

17. John broke the window.

この文で、broke は window に直接的に patient の役割を与え、John は broke the window により、間接的に agent の  $\theta$  役割を与えられる。

### 3.2.5 「統率理論」最小条件「ある要素に大して複数の統率子がるとき、最も近い統率子だけがその要素を統率できる」

18. a \*who<sub>i</sub> do you think [that t<sub>i</sub> saw Bill]  
b who<sub>i</sub> do you think [t<sub>i</sub> saw Bill]

ただ必ずしも近さによらず、意味的な優位性が近さよりも重要な働きをしているような場合もあり、相対的なものと考えられる。(これは、後でふれるが、Chomsky の「自律的統語論」の限界でもある。)<sup>(4)</sup>

以上、どういう文法理論であれ、言語のなかで「近さ」というものがもつ重要さというものは、いろんな形でかかわることを見た。

## 3.2 『よい連続の要因』

つぎに、「よい連続」がどのような点にみられるか例をあげる。

たとえば、つぎのような「制約」は、結局は「関係のつよいものが近くにきて、知覚しやすい構造を作ろうとする」といことを示している。これは、「近接」ともかかわるが、関係のふかいもののつながりは、「よい連続」をなすということでもある。たとえば、Grosu (1972) には、(20 a, b) を説明する (19) のような制約がある。

19. Internal Clause Constraint: Sentences containing an internal NP that exhaustively dominates S are ungrammatical.

20. a That the world is round is obvious.

b \*Is that the world is round obvious?

つまり、'Discontinuous components are perceptually complex in proportion to the structural complexity of the intervening material.' (Grosu 1972 : 71)、(下線引用者) すなわち、連続がわるくなると、知覚しにくくなってしまふわけである。

連続がわるいと、要素どうしの関係を見つけるのが難しく、「再処理の必要」(the need of REprocess) (Bolinger 1978 : 123) となり、非文をつくってしまう。

21. a \*What did John say where he bought?

b \*This book, Mary, I gave to.

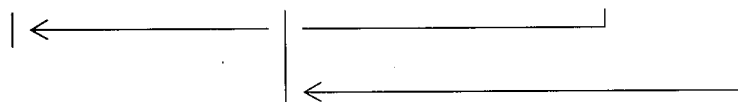
などの非文、「二重転位」(double dislocation) の例はまさしく、この理由によるものであろう。これは、また、つぎの例でも示すことができる。

22. a It is easy to cut the salami with my knife.

b My knife is easy to cut the salami with  $\phi$ .

c \*This is the salami that my knife is easy to cut  $\phi$  with  $\phi$ .

c' This is the salami that my knife is easy to cut  $\phi$  with  $\phi$ .



要素の複雑な移動は、基本的な構造を破壊し、要素間の関係を乱してしまう。複雑な移動をすると要素の関係がつかめないので、意味解釈ができない非文をつくってしまう (Kuno and Robinson 1979 : 477) のである。意味的にも関係がふかいものは「よい連続」をつくりやすいのである。<sup>(5)</sup>

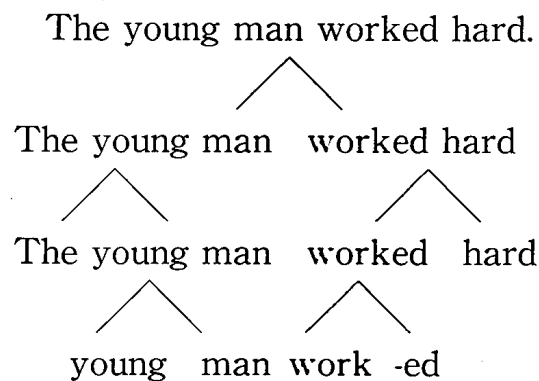
### 3.3 『閉合の要因』

つぎに、「閉じる」ものが「よい gestalt として認識されやすい」ということを考えてみたい。

「閉じる」ということは、「外との関係を断つ」ということと同義であって、内部の要素どうしの関係が、その外の要素に対する関係よりも強いということである。すでに見たように、近いものほど関係をもちやすく、また関係がふかい、ということからすれば furiously barking dogs において、\*barking furiously dogs ができないとか、Whose book are you looking for? において、\*Whose are you looking for book? (Ross 1984: Left Branch Constraint) / \*For whose book are you looking? が非文となるのは、関係ふかい、閉じたもの、whose book, look for から、その一部を引き離したためであると考えられるであろう。( \*What are you looking for ...and pencils? のように、A and B の構造から、その一部の B だけを移動させることは出来ないという「等位構造制約」もその一つである。) 閉じたものが一つの「運命共同体」的な性格をもつのは、本来意味的なものであろうが、統語的には、一つの構成要素として表される。

いま、The young man worked hard. を、直接構成している要素に分析(「直接構成要素分析」)してみると、

23.



のようになる。これは最も端的に言えば、要素間の関係のふかさ、閉じた度合

いを示したものである、といえる。young と man、work と -ed の関係が一番密である。the young man と worked hard がまた密に関係しており、最終的には、これがつながって、もとの文を構成している。

24. That he was happy was evident from the way he smiled.

\*\*\* \*\* \* \*

\*の箇所では click をいれて、どこに click があつたかを被験者にきくと、要素間のつながりのふかいところではなく、要素間のつながりの弱いところ、つまり happy と was の間にあると判断する、という事実 (Slobin 1971 : 36) にも、この「閉じた」部分というものが、聴覚の点からも、いかに人間の認識のしかたに本質的なものかわかる。

Reinhart (1976 : 201) は、言語の知覚には、できるだけはやく 'closure' を設定するメカニズム (a mechanism of establishing 'closure' of units as soon as possible) が働いており、

25. The boat floated on the water sank.

という「袋小路文」(garden path sentence) が与えられると、the boat floated on the water で clause として処理してしまう。そのあと、sank まで来て、その closed clause が、「再開」(reopen) され、再分析 (reanalysis) がはじまるという。この過程こそ「揺れ」を通して平衡にいたろうとするメカニズム (沢田 1965 : 141) である。

この要素間の関係のふかさ、これが閉じたまとまりを作るということは、「島」(island) を思い起こさせる。「島」とは「移動によって要素を抜き出したり、それの外の要素と関係づけることが不可能である領域」のことであるが、これはまさしく「閉じた」領域のことである。



26.\* To whom<sub>j</sub> do [IP you know [CP what<sub>i</sub> [IP he gave t<sub>i</sub> t<sub>j</sub>]]]

この文が非文になるのは、wh 補文から what を抜き出しており、wh- 島の制約に違反しているためである。

27.\* [CP<sub>1</sub> which race<sub>i</sub> [IP did John believe [NP the claim [CP<sub>2</sub> that [IP Mary had won t<sub>i</sub>]]]] ?

これは、いわゆる「複合名詞句」the claim that... を含んでいるが、ここが「島」を作っており、この非文は that 節の中の要素を、that 節、the claim をこえて移動したためにおこっている。(これは、すでに見た、すぐ近くにしか移動できない、という「下接の条件」をもおかしていることに注目したい。) もう一つの例をみよう。

28. [CP who<sub>i</sub> [IP<sub>1</sub> [S [NP [CP<sub>2</sub> t<sub>i</sub>' that [IP<sub>2</sub> the president visited t<sub>i</sub>]]]] generally accepted]] ?

これは文主語から要素を抜きだしたものである。主語はもともと、話し手と聞き手の間でそれとして了解されたものがくるところで、情報としては「既知」である。新しい情報となる焦点部分とちがって、ここもまた閉じた部分となっている。ここから要素の抜き出しが、「文主語制約」に違反しているわけである。(ここでも who の移動は、NP、IP<sub>2</sub> の二つの境界をこえて要素を移動したことになり、これは「下接の条件」に違反したことになる。)

以上、gestalt 心理学でいう「閉じた」部分が、よい gestalt として認識されやすいということと、いくつかの言語事実、それを説明する方法としての文法との関係をいくつか見てきた。「島」という文法上きわめて重要な概念は、まさしくこの「閉じた」部分そのもののことである。

3.4 『類似の要因』

29. a \*John likes singing songs and Mary.  
b \*John expected Mary's departure and that Jane would arrive.

(29 a, b) の非文から、and で接続されるものには、きびしい制限がることから、Kuno (1974) はつぎの (30) を、

30. Conjoined noun phrases must be similar in syntactic and semantic category. (下線引用者)

また、(31 a, b) から、Schachter (1977) は、(32) のような制限を提案した。

31. a \*John ate with his mother and with good appetite.  
b \*What are you doing and shut the door.

32. The coordinate constituents of a coordinate construction must belong to the same syntactic category and have the same semantic function. (下線引用者)

つまり、Kuno (1974)、Schachter (1977) は、「A and B と等位接続するとき、A、B はともに、統語的にも、意味的にも類似したものでなくてはならない」ことを示している。では、つぎはどうであろう。

33. a Sam hates reptiles, and Sandy hates to talk to Oh.  
b \*Sam hates reptiles, and Sandy...to talk to Oh.

34. a John left at 11 and at 12 Bill left.

b \*John left at 11 and at 12, Bill....

いわゆる「空所化」(gapping)にはいくつかの制限はあるが、この例を(33)、(34)の部文について見よう。等位接続される文が平行性をもたない時には、これを空所化すると、非文か、それに近い文になってしまう。(33)では hates の目的語が、reptiles と to talk to Oh という名詞と不定詞であり、(34)では at 11 と at 12 の位置の点で文の構造がちがう。このように空所化は、接続される要素、構造の点で厳しい平行性が要求され、これあみたされないと、空所化はできない。つまり、空所化は、『類似の要因』がみたされた文構造にのみ成立するものである。さらに類例をいくつかあげてみよう。

35. a It is more likely that John will leave than it is that he will stay.  
b It is more likely that John will leave than that he will stay.  
c \*It is more likely that John will leave than that he will stay is.
36. a It is easier to read books than it is to write books.  
b It is easier to read books than to write them.  
c \*It is easier to read books than to write them is.

(Higgins 1974)

そのほかにも、\*What was John eating beans and ...? など「等位接続名詞句制約」(conjoined NP constraint)などもふくめることができるが、この制約は、基本的には、等位構造は、視点の同じものだけが接続できる、というごく一般的なことからであるが、ここではこれ以上はふれない。

つぎにストレスとの関係について、少しふれておく。

37. a John hit Bill and then George hit him (him = Bill).  
b John hit Bill and then George hit hím (him = John).

(Schmerling 1974)

(37 a) のように構造が平行しているときには、him にストレスがないが、(37 b) のように平行性がないときには、「主張の重要な部分である」him はストレスをもつことになる。このように、構造の平行性とストレスは深い関係にあり、これが乱れるとストレスがこれを補うことになる。このように、言語事実としては、構造の類似性は意味と深くかかわり、これはストレスとも直接に関連している。語順に機能をたよることの多い英語では、「ある種の平行性の制約」(some kind of parallelism constraint) (Higgins 1974 : 163) が常に働いている。

最後に、構造の平行性にもとづくこのような現象は、実は、「経済性」でもあることに注目したい。‘All cases of ellipsis or deletion ...are examples of economically motivated reduction’ (Haiman 1984 : 802) であり、‘the motivation for all cases of deletion under identity, including those involved in coordination reduction, is economic’ (Haiman 1984 : 808) (下線引用者) なのである。

音の面での平行性といえバリズムであろう。強弱のストレスの繰り返しは最も基本的なものでであろう。欽定英訳聖書と Shakespeare の全集は、重要さの点からいっても第一にあげられなければならない、英文学史上の二つの「大金字塔」(中島 1951 : 132) といわれるが、その大部分は、弱強五歩格 (iambic pentameter) で書かれていることはよく知られている。「英語の強勢間の所要時間は予想されるほど均一ではない」が「知覚心理レベルでは、物理レベルよりも……等間隔にとらえられ」(窪菌 1991 : 145) る傾向がある。

38. a bréad ànd búttèr (swsw) ~ \*butter and bread (swws)

(s : 強 w : 弱)

b sùch à préttÿ gírl ~ \*a such pretty girl

c Shé wàs máde tò gó. ~ \*She was made go.

d spéak Chinése ~ à Chínèse lántern

(38 d) では、ストレスのリズムを守るので Chinese のストレスの位置が変わることに注目したい。

もともとわれわれの認識には、「あらかじめ認識すべき内容の鋳型というものをわれわれの内部にそなえていて、感覚対象がこれにあてはまるかどうか、それをあてはまれば、それを認識する」のであって、このように「類似」というのは、「そういう観念を使ってつくった分類が生活に必要なだから」(渡辺 1978: 104) 人間には最も基本的な要因の一つである。

4. gestalt 心理学でいう、単純なもの、近いもの、閉じたもの、類似したものが、よい gestalt として認識されやすい、ということは、単に視覚的なものについてばかりではなく、われわれの認識の仕方全体についていえるものであることは、すでにのべた。これは最も人間に特徴的な言語についてもいえることが示されたと思う。とくに、注目し、確認しておきたいことは、「近い」ということと、「閉じる」ということは、実は、互いに深い関係をもっていることである。一つの現象の裏表といってもよい。

こうして見てきたように、Chomsky の文法は、「よい gestalt」の四つの要因のうち、ことのほか『近接の要因』、『閉合の要因』を中心にする説明法をとっていることがわかる。彼にとって、「局地性」(locality)とは、まさしく「近接」のことであり、「島」(island)とは「閉合」(closure)のことである。「制御」(command)・「統卒」(government)も「閉鎖」の範囲の程度によるちがいであろうし、「下接の条件」(subjacency condition)「閉じ」て、かつ「近い」ということであらう。

5. 最後に、いままで見てきた文法規則をべつの側面から検討してみよう。

上にみた、もろもろの規則・制約は、それなりに gestalt 心理学でいう「要因」をみたしており、認識的にも正当性があると考えられる。しかし、これから見

るように、変形文法の出発点である「自律的統語論」が必然的にもつ限界をさけるわけにはいかない。つぎの事実をみよう。

Erteschik-Shir (1977) は、(39 a) のような枠をもうけ、Vのところにはいる動詞について、その許容度に、(39 b, c) のような段階があることを示した。

39. a What did you V ((to) them) that he had done?  
 b acceptable: say, tell, report, announce, ...  
 questionable: grant, murmur, mumble, yell, ...  
 bad: purr, snarl, editorialize, simper, ...  
 c Fred announced/told me /reported to me that Bess will certainly marry, but it is not at all certain.  
 ??Fred exclaimed/yelled that Bess ~ .  
 \*Fred snarled/lisped that Bess ~ .  
 d A matrix which is subordinate(i.e....where the embedded clause is dominant and allows extraction)will be called a bridge. Extrac-tion out of an island is possible only across a bridge.  
 (1977 : 50) (下線引用者)  
 e ...the more semantically complex the matrix verb is, the more likely it is that the matrix will be interpreted as being dominant.  
 (1977 : 8) (下線引用者)

そして、(39 d) のような 'bridge' を提案し、その従属節からの要素の移動は、主節の動詞の意味がゆたかな場合は不可能であるとした。「抜き出し」は、意味的なもので、統語の問題ではない、とした。この 'bridge' について、Chomsky は、

40. Just what property of the matrix VP permits it to be "bridge", permitting escape of the wh-phrase from the S "island" is unclear...

(Chomsky 1977 : 85) (下線引用者)

として、'bridge' の性格が「はっきりしない」(unclear) という。これは、これらの現象を、意味を考慮せず、統語的に説明しようとするからにほかならない。<sup>(6)</sup> この現象は、Horn が、

41. Many of the island constraints on movement rules identified by Chomsky and Ross are probably best(i.e. most explanatorily) viewed as language specific grammaticalization of perceptually based processing strategies. (Horn 1978 : 216) (下線引用者)

というように、人間の「知覚」の上でも根拠のあるものである。

こうしてみると、Ross が自分の主張する統語的な制約について、

42. Why should complex NP's, coordinate nodes, sentential subject clauses, and NP's on the left branches of larger NP's all function the same in defining islands? Can islands be shown to behave like psycho-linguistic entities? (下線引用者) (Ross 1984 : 291)

というとき、これまで見てきたところから、閉じたまとまりをつくっている部分、「島」はまさしく、認識的なまとまりを作る部分であり、Ross の疑問にたいする答えは、まさに 'yes' でなければならない。

43. 「文法的な単位は多くの場合、同時に意味的な単位である。こうした「パターン認識」を可能にするのは、まとまりをまとまりとしてとらえる人間の認識力である。このような能力は人間にとって生得的なものであり、……」

と沢田(治)(1993:67)はいう。ここからも、Rossの疑問にたいして、yesと回答できるのは、いかにも正当であると思われる。これを支持することが、Grosu, Reinhartによってもなべられていることを指摘しよう。

44. (1.99e)Can islands be shown to behave like psycholinguistic entities?

とGrosu(1972:36)は、Rossの疑問((42)の下線部)を(44)のようくりかえし、

45. A large part of the remainder of this thesis will be devoted to arguing that the answer to (1.99e) is yes. (下線引用者)

のように、はっきり、yesと答えた。また、Reinhartは、

46. <The psychological reality of c-command domains>

Finally, it is in place to ask, if it is established that the MDH (= Minimal Domain Hypothesis) is indeed true, what could be the reason for this? More specifically, why should unrelated rules of different levels (e.g., syntactic and semantic rules) operate within the same domain? An answer which is suggested is that c-command domains reflect the processing ability of the mind, which means that it is psychologically difficult to process nodes that are not within a minimal domain, or to retain in the processing stage more than one domain at a glance. (Reinhart 1976:200-201) (下線引用者)

以上、「意味的・統語的規則がおなじ範囲で働くのは、心の処理能力のため」と両者の関係のふかさをのべているように、文法上のさまざまな規則・制限は、当然のことながら、人間のもつ認識のし方に密接に関連している。「島」とは、



いわば、認識のおよぶ範囲をらわす。文法といわれるさまざまな言語現象にかかわる制限は、その制限が人間の認識の力にさからうものだからであろう。人間のもつ認識の仕方、四つの「要因」をふまえない説明方法は、基本的に無理な説明方法である、といえるであろう。心は、「そのメカニズムを通じて人間に与えられる種々の情報を処理して自己の活動をより合目的にする能力」であり、人間が生きていくのに「大きな価値」(a great survival value) (Miller and Laird 1976 : 40) をもつものだからである。「自律的統語論」を主張した Chomsky も、(47)、(48) のように考えていたのは、きわめて興味ぶかい。

47. ...each of these conditions may be thought of as a limitation on the scope of the processes of mental computation...

(Chomsky 1977) (下線引用者)

48. The solution to Plato's problem must be based on ascribing the fixed principles of the language faculty to the human organism as part of its biological endowment. The principles reflect the way the mind works within the language faculty.

(Chomsky 1988 b : 27) (下線引用者)

## 第2章 「創造性」(creativity)

「これでいいと思える言葉を探して苦勞もしたし、ちゃんと探しあてたものの、こんな文章を書いていると、無理に外からの強制力のようなもので促されているような気がした」(オーウェル「なぜ書くか」)

### 2.0 創造性とは

英語学は、Chomsky を境にして、従来の英語学から大きくその姿をかえることになった。ここでは、Chomsky の言語理論の「創造性」とはどう考えるべきなのか、どう位置付けるべきものなのか考えてみたい。

彼の「創造」の意味をよく伝える箇所として、たとえば、Chomsky (1972: 6) の、'the creative aspect of language use, "the distinctively human ability to express new thoughts and to understand entirely new expressions of thought, within the frame-work of an "instituted language,' (下線引用者) をあげることができるが、それとはべつに、語彙としての「創造する」にあたる 'create' は 'bring into existence' (COD) とされており、'bring birth to, generate' の意味をもつ 'produce' と部分的には一致する。現に、produce、production は、たびたび変形生成文法にみられる用語<sup>(1)</sup> であるし、「創造性」(creativity) をもとにした変形生成文法が generative grammar とよばれている<sup>(2)</sup> こともその一端を示していると言える。<sup>(3)</sup>

もし、いま仮に、create を produce ほどの意味に解釈するとすれば、これはなにも新しいものではないのであって、いわゆる英語教育の目標である '読み、書き、聞く、話す' の四技能のうち、'書く、話す' にあたるものである。しかし、文法プロパーの中で、いままでなかった文をつくりだすものとしての創造性というものが問題とされ、言語理論にくみこまれるようになったのは Chomsky をもってはじめとする。従来、言語は恣意的な記号の体系とするのが一般的で

あるが、近来、「生産性」(productivity)を加えるものが多くなったように見受けられる。「productivityこそ、言語の一般的性質である」(Lenneberg 1964: 100)とか、「新しい発話を生み、理解する能力こそ言語の本質(essence)であり、テキストの例だけを基礎にして言語構造を記述しようとするなどには不十分である」(Carrol 1964: 118)などもその例であろう。<sup>(4)</sup>

この創造性は、心理学と密接に関連するものであり、言語学と心理学との結びつきが強調されるようになったのは当然である。Katzが「言語能力の理論は、言語行為がどのようにして生み出されるかを記述する、より広い意味での心理学理論の一部になった」(1966: 118)とか、「言語行為は straightforward な心理学理論となろう」(1966: 119)といているのにもみられる。Chomskyが「言語学は(認知)心理学の一部」(Chomsky 1982: 129)であるとし、創造性とその能力について、心理学を重視しており、「文法にいたる方法に関する問題とは、言語学プロパーに関するよりは、むしろ「案出」(invention)の心理学に属するものである」(1964: 234)と考えている。<sup>(5)</sup> 言語研究の態度の厳密さを求めて、主観的なものは学問的でないとして、はっきりと心理主義的な考えに別れをつけていた言語学は、ここで再び、創造性を中心にして、大きく心理学的性格を帯びることになった。

## 2 Descartes と Humboldt

### 2.1 Descartes

2.1.1 このように脚光をあびることになった創造性は、もともとどのようなものなのか、まず、Descartes からみていきたい。

Chomsky の考え方が、構造言語学の Harris の理論をその背景にもっていることは、Chomsky の 'transform' という用語が Harris のものであることでもわかる。ここでも Chomsky の理論がうまれる必然性をみることができる。<sup>(6)</sup> また、「すべての文構造はいくらかの単文構造の組合せ、あるいは変形されたもの

である、ということであらわす根拠をあたえる」Chomsky 1964 : 105) というところからも推測できよう。言語理論をデータの「要約」(summary)としかみない「観察の妥当性」(observatory adequacy)におわるものとし、Harrisはもっぱらその構造手続き的なことに触れているのに対して、Chomskyはこれに人間固有の言語能力、生産性を結びつけたのである。彼はこの言語能力こそもっとも重要なものであるとして、「文法とは言語能力を説明することである」(A grammar is an account of competence) (Chomsky 1966 : 10) といいきった。ここで人間共通な言語能力を基礎にして、単純な文から、組み合わせ、変形によって新しい文をつくりあげ、発話とするという Chomsky 固有の理論ができあがったのである。<sup>(7)</sup>

2.1.2 Chomsky が人間共通の生産的な能力に関して、その根拠を Descartes にもとめていることは明らかであって、自ら Cartesian Linguistics (1966) を著して、その論拠を説いているとうりである。ここでは、まず、Descartes にしたがって、Chomsky がその根拠としたと思われる箇所をみることにしたい。

Descartes が、その著書のなかで、言語について言及しているところはいくつかあるが、その中でも強くとりあげられているのは『方法序説』(Discours de la Méthode) のつぎの箇所であろう。ここで Descartes は、人間に特徴的な能力について、機械と比較することによって、その差異点をつぎのようにのべている。

...il n'y a point d'hommes si hébétés et si stupides...qu'ils ne soient capables d'arranger ensemble diverses paroles, d'en composer un discours par lequel ils fassent entendre leurs pensées... (Librairie Hachette p.110)

つまり、「いろいろなことばを組み合わせる」ことによって、自分の考えを相手にわからせることができないほど鈍重で愚鈍な人はいない」というこの箇所は、人間共通の言語能力の根拠としてはきわめて有力なものである。<sup>(8)</sup>

Descartes は二元論であるが、肉体、精神を変形文法の phonological component, semantic component または、surface structure, deep structure (Chomsky 1966 : 33) にあてはめることの正当性はさておいても、上述したような理由で、人間は機械とはちがうものであるということは、Chomsky 自身が「人間だけが単なるオートマチズムとはちがうものだ」という Descartes の考え方 (Chomsky 1964 : 51) という言い方をしているところからも明らかである。

科学的に厳密であろうとしたアメリカ構造主義が、結局、言語学の人間不在を訴えられるようになったが、ここで機械にはないものを、人間の本質としてとりあげ、その生得的な能力に関して心理を重視したことによって、言語学に人間をとりもどすことができたということはいえる。<sup>(9)</sup>

## 2.2 Humboldt

2.2.1 さて、Chomsky は、Descartes の言うこの「ことばを組み合わせて、自分の考えをわからせよう」という能力がどのように動的にはたらくかについては、別にもとめなければならないとする。そして、langue のような単なる項目の「目録」(inventory) ではなく「生成の過程の一組織として、底に潜む能力」という Humboldt の考えにかえらなければいけない (Chomsky 1965 : 8) と語っているところからも、活動性については、これを Humboldt に求めていたことがわかる。

当の Humboldt の言うところによると「言語は人間の内部的なもの、直接的に精神の発露」(泉井 1948 : 227) の一つの型 ('Form') であって、言語は教えられるものでもなく、むしろ心情のなかに喚起されるものにすぎないものであるとされる。「言語の生産ということは人間の内的要求である」(岡田 1948 : 40) という Humboldt の言葉は言語を出来上がった「死んだ産物」(ein totes Erzeugtes) としてよりは、むしろ「生産活動」(eine Erzeugung) とみられているのも又当然のことである。即ち、「言語は所産物 (ergon) ではなくて活動性 (energeia) (岡田 1948 : 84、亀山 1984 : 73) と規定されていたのである。<sup>(10)</sup> こ

ここではじめて、Descartes のいう、人間に生得的な言語能力と Humboldt の活動性が結び付けられたのであった。

しかしながら、よく見ると、Humboldt の考え方が、Descartes の考え方と相容れるものではないことが明らかになる。つまり、Humboldt は、人間の内的なものの一つの発露として言語を見、その現われ方を「型」として、言語の違い、文化の違いを、この「型」の違いとしたのである。即ち、彼にとって文化は、言語に対して密接な関連をもつものであり、性格的には、言語と文化のつながりを強調的に理論化した Sapir-Whorf の理論にちかいものであることがわかる。この Humboldt と Sapir-Whorf がいかに深いつながりをもつものであるかは、すでに R.L. Brown(1967)によって明らかにされている。ここではむしろ、共通性よりも個性というものが重視されているわけであって、「普遍的な道具」(un instrument universel)としての、理性を重視する Descartes とはいつか同行できない性質のものなのである。Chomsky 自身もこのことを認識していたのであって、「これは動物的なものとしてよりも、思考・自己表現の方法として見るかぎりにおいては、たしかに Humboldt は Descartes の枠に入ることは入る」(Chomsky 1966 : 21)とか、「心的過程におけるこのような役割を個人の言語に帰したという点においては、Humboldt は Descartes 的言語学から根本的に離れる」(Chomsky 1966 : 21)という彼自身の言葉からも知ることができる。

いずれにしても、Descartes と Humboldt の考え方は、Chomsky の文法論に根拠を与えるために関連づけられるとしても、これはあくまで便宜上のことであって、本質的には相容れるものではない。自らも『フンボルト』という著作をもつ泉井は「彼(Chomsky)による Humboldt の受け取り方は、片面的であって、……デカルトとフンボルトは元来背駆的なのである」(泉井 1967 : 132)という言葉でこのことをのべているところからもその一端を知ることができる。ある意味では、Chomsky は Descartes を強引に「我田引水した」(山元 1993 : 33)といわれても仕方がないであろう。<sup>(11)</sup>

2.2.2 このようにして、その普遍性、抽象性とともにも彼の文法理論の強力な論

拠である創造性は、その根拠を裏付けられることになった。

「創造性」は、「ことばを組み合わせて」というところに、具体的にはあらわれ、その根拠を Descartes, Humboldt にもとめたが<sup>(12)</sup>、「有限の手段を無限に使用」(Chomsky 1965: 8)することによって可能となるが、必ずしも明確ではないところもある。このことは、Chomsky 自身の「いかにして創造的思考が可能であるかに関してまったく神秘である」(Chomsky 1966: 96. note) とか、「生成の能力に関する問題は……まったく未解決のままである」(Chomsky 1964: 135)ということばのなかにも、その創造自体の位置付けについても不明確さをうかがうことができるであろう。

### 3. 「問題解決」(problem solving)

以上、われわれは Chomsky の「創造性」について、Descartes の人間共通の言語能力と Humboldt の活動力、生産的な見方がその基礎になっていることを知った。われわれはここで、再び創造性は、どういうつながりを文法理論と関わりをもつのかを考えなければならない。

3.1 ここでは、とくに「思考・認識」の点から、この「創造性」の問題にふれたい。まず、思考について明らかにしておかなくてはいけないのは、思考の対象に対する取り組み方の問題である。これは、以下で見るように、基本的には二つに分けることができる。

即ち、いま認識という問題を取りあげた場合、われわれの認識は、第一章で簡単にふれたように、多数の互いに独立な、しかもそれ以上細かく分けることができない最小の要素から成り立っているとし、まずその最小の要素(「論理的原子」)と考える方法がある。さらにその論理的原子は一つの判断(いくつかの個物を著す言語を一つの述語で結合したもの)つまり、「命題」のかたちをとるものとし、この「命題」がさまざまに結合することによって現実の複雑な認識が得られる(沢田 1966: 199)と考える方法である。これには、個々の感覚から

得られた単純な観念がいくつか集まって、複雑な複合観念なるものが出来上がるという J. Locke の経験論にも似た一面をみることができるといえよう。<sup>(13)</sup> このように一つの全体を、部分の集合だとする考え方はきわめて古いもので、一名「原子論」(atomism)と言われ、分析的で、一般にアリストテレス的思考とも呼ばれているものである。

3.2 このような部分の集合を全体と考える分析的原子論に対するものとしてあげられるのが、非アリストテレス的思考である。これによると、全体(whole)というものは、単に部分の集積なのではなくて、むしろ全体から部分が規定されるような性格をもつものであるとし、全体の優位性をつよく打ち出す考え方であり、「全体論」(wholism)ともよばれる。先のアリストテレス的思考によれば、全体としての性格は、部分の集積の結果として自らを決定するものである、とするのに対して、全体論では、あくまで対象を全体的、または関係中心的に見、部分を独立した要素としてではなく、全体の結構によって、その位置、性質が規定されてゆくものだ(中村(克) 1960:294)という立場にたつ。一般に、対象の性質を極めようとする場合に、それを各要素に分析することは、古くからある考え方であるが、単に要素に分析してみるばかりではなく、むしろその要素のつくりだす関係に注目して、全体をつくりだす様態を追求しようとするのは近代の科学的な考え方の特徴である。多くの場合、全体は単なる部分の集積ではないのであって、そこにプラス  $\alpha$  として、「要素間の関係」を加えなければいけない。言語についても、まったく同様であって、要素の単なる集積が、そのまま言語表現として通用するわけではない。その要素間の統合的な関係が重要である。このことは Saussure のなかにもはっきりみられる。<sup>(14)</sup> 言語学的実体があるとすれば、それは機能または言語単位間の相互の関係の中に見出されるべきものであろう。従来の言語学に比較して、構造言語学は、この要素間の関係を重要なものと見た言語観であると言える。関係というものは当然それをつくる要素を前提とし、他の要素とその区別を予想するものである。

非アリストテレス的な思考においては、いわゆる gestalt 心理学に典型的に



見られる。ここでは部分の認識は、全体ないし、他の部分との関係によってきまるのであって、生物体の環境と相互作用についていえば、両者の「均衡」が一時的に破壊されたとき、その失われた「均衡」を回復するに適應してゆく働き」（滝沢 1959：12）と規定するところこそ根本をなしている。ここでは、心理的な作用は全体的な均衡をとりもどす過程としてとらえられている。思考とは、まさに全体的なバランスがくずれたとき、おれをバランスのとれたもとの状態にかえろうとする動きにほかならない、とするわけである。心理学では、この均衡状態を homeostasis とよぶが、これを求める動きというものは、あたかも、病気の時、身体が常に回復すべく有機的にうごくのと同じであり、これが思考の場合、精神的なものであるとする違いよりないとする。つまり、思考とは、精神的な均衡を取り戻そうとする働き、ひろい意味の問題解決である。それは「思考の一つの特徴は、問題解決の過程である」ということである。<sup>(15)</sup>「問題とは何らかの意味において、生活体の行動または意識の円滑な進行を妨げる状態であり、この妨害をとりさり、また克服する過程が思考である」（今田 1965：267）などはまさにその典型的なものである。

さて、ここで見落としてはならないのは、思考というものが、傷、病が癒えるように自動的に均衡をとりもどす働きとしてとらえられていることである。これは事実と反するのであって、問題解決として規定される思考は決して無意識的な、自動的なものではない。もっと意識的、主体的な（ある意味では努力を要する）ものである。ここにこそ、gestalt 心理学的な思考についての考えが、「条件と要求をまず相互に関係づけて考える主体の活動が無視されてしまっている」（ルビンシュテイン 1962：26）という点で、決定的な欠点を指摘されたのである。ここではじめて問題解決にあたる主体性が重視されることになったのであった。

3.3 現実の問題解決にあたっては、知識とか過去の経験がその役割を果たすことは明白であるが、この知識、経験が解決の資料としては、広い意味での言語として情報となり、提示されると考えてよい。こうして、示された情報資料に

もとづいて、それを分析したり、総合したり、比較したり、その結果を基礎にして、さらに最終的な問題解決を推理しながら、いろいろな方法が試みられていくわけである。

3.4 ここで注目すべきことは、この問題解決の過程の一連の分析、総合、推理<sup>(16)</sup>などというものは、実はわれわれが、概念を構成するプロセスと同等のものであることである。つまり、具体的に経験した個々の例から、一つ概念を抽出しだすのと同様である。資料不足や、観点がまったく的はずれでないかぎり、そこから抽象される観念は同じものになる。人間の経験が、それぞれちがうにもかかわらず、概念形成が同じようになりたつのはそのためである。資料不足や観点がそれぞれ違うにもかかわらず、そこから Descartes が理性というような生得的観念によって認識したのに対して、Locke が経験の重要性を主張して、経験論をとなえながら、その根底に前提されていたのは、広い意味での抽象化、概念化の能力だったのである。この分析、総合、推理というものは人間生来の抽象力、概念化の能力に基づくものであって、「抽象された特性が新しく、総合され、その結果生まれる抽象的な総合が、思考の主たる道具となったとき、一つ概念が生まれるのである (Vigotzky 1965 : 78)。人間に共通な能力に基づくという意味では、個人的なものではなく、一般性、客観性をもったものであって、それなりに論理性をもつものである。(この点については、またふれることになる。)

3.5 以上見てきたように、「ある価値基準（ここでは均衡回復としての問題解決）を目標にして、一つの情報として、概念の形でたくわえられている既得の知識、経験にもとづき、それを分析し、総合し、さらに推論することによって、新しい解決への方向をさぐりだしていくこと」これこそが、本当の意味における創造と名付けられるべきものである。「想像は創造の母体である」(滝沢 1967 : 86) とか、「推論は創造的である」という James (1967 : 147) という言葉は、ここで正しく理解されるであろう。くわえて、つぎの言葉はこのことを

最もよく表しているといえよう。すなわち、

「ある課題に直面した人は、その解決のために、多くは、まず再生的思考をして、過去の経験や知識に解決法をもとめるであろう。それで解決できないとき新しい方法を考えださなければならない。つまり、創造的思考をせねばならない……まず、仮説として想像を描き、その中に推理の筋道をたててみるであろう。そして仮説・検証をくりかえしながら次第に、もしくは突然に、新しい構造の思考が現われ、それが客観化されたとき、創造がおこなわれる、というであろう。」（滝沢 1967：87）

この創造的思考の条件は、(1) 思考の方向が明瞭、(2) 不合理でないこと、であることは、いままでのべてきた「創造」の性格を示してあまりあろう。問題解決という最終的な価値基準を無視して、いたずらに新しい組合せを作り上げたとしても、それは決して創造的とはいえない。しかも、すでに見たように、この過程こそ言語行為の過程と同じものなのである。すべての基礎になっていたものが、まさに Descartes のいう人間共通の生来的な言語能力と同等のものはずである。Chomsky が「言語習得のしくみは、問題解決や概念形成にも応用できる知能の構造全体の一分野である」（Chomsky 1965：33）という言葉の中にもこのことが十分に示されている。これで、創造、概念構成、問題解決、思考のつながりが明瞭になる。

3.6 以上、創造性と問題解決、思考の関係について考えてきた。ここでは、このことに関わるもう一つのことを検討したい。

言語における創造性とは、上でみたような一連の過程を経て、意図したことを表現するという目的、その価値基準を達するものでなければならない。言語は結局、要素とその関係から成っているとみることができるが、この場合、関係というのは要素である語の関係をあらわす構造規則（文法）である。言語は恣意的な記号の体系であるが、記号論理学者たちは、記号とこれを使用する人

間との関係を語用論、記号とそれが指し示す事物との関係を意味論、一つの記号と他の記号の関係を構文論と定義するのが一般的である。まさに、文法は記号と記号との関係なのである。「言語」にあたるギリシャ語 *lógos* が「理性」という意味をもっているが、これは、合理性のある人間にのみ言語がある、ということ象徴的に示しているであろう。

問題解決、思考などはこの根底に、人間共通で、生得的な能力が前提されていないかぎり説明できないものである。この能力こそ、ときに概念化の力、抽象力とよばれ、Descartes においては「生得的な理性」とよばれ、Chomsky が「人間共通の言語能力」として、彼の理論の根拠にすえたものだったのである。この能力が、きわめて普遍的で、客観性をもったものであること、そこに見られる論理的性格については、論理学の方からも裏付けられるようになった。すなわち、

「いかなる言語をとってみても、論理法則は概してすべてに適用する。したがって論理法則は一般に言語法則と言いかえてもよい……この事実は人間が言語を使用するに至る過程に共通なある構造が存在したことを示すものと考えることが出来るかも知れない……この意味で人間は先天的知識をもつという表現がかなり信憑性をもったものになる」(坂本 1949 : 172)

とか、

「記号と記号の結合の仕方(即ち構文論)を表すために用いられる特別な記号は言語によって異なるけれども、結合の仕方それ自身は共通であるといったほうがいいかも知れない」(沢田 1966 : 51)

という論理学者の言葉はこのことを明瞭に語るものである。

Chomsky は、言語が経験から単なる抽象によって得られるものではなく言語を習得する子供は自分が「学んだ」ことよりはるかに多くのことを知ってい

る（いわゆる「プラトンの問題」）とか「文法についての彼の知識は、示されたはじめのデータをはるかに越えているのであり、決してこれらのデータからの「帰納的一般化」（inductive generalization）ではない」（Chomsky 1965：33）という。これは人間に何かしっかりした構造を生まれたときから知っていて、その上に非常にわずかな未知の部分を経験からきめていけば、それで言語の構造がわかると考えざるを得ないし、また Descartes の生得的な合理性をとりあげた Chomsky の意図もはじめて明確になる。

むしろ、言語習得に関するかぎり、一般論としては「経験論においては、合理論におけるよりも起源の問題が一層重視されており……対象認識の本性的見方においては一致している」（高橋 1948：59）ことも否定できない。<sup>(17)</sup>

3.7 L. Bruhl は、未開人の文化や言語の研究をして著した『未開人の思惟』の中で、未開人の文化について、それがいかに欧州人とちがうかを例示し、かつ文化と言語とのふかいつながりについてのべている。つまり、Sapir-Whorf に近い考え方をしているが、欧州人の論理に比較してみると、「未開人」の考え方は非論理というよりは、むしろ論理の段階に達していない、という意味で、前論理的だと言っている。しかしながら、今までみてきたところからも明らかなように、この見方は表面的な現象のみに注目し、その過程の論理性を看過し、いわんや欧州人の論理を押しつけたという点で致命的な欠点を論理学者から指摘されることになったのである。とくに、沢田（1966：25）は、L. Bruhl の名をあげ、このような見方は「ヨーロッパの言語、文化を中心として未開人を位置付けようとする無意識の独善にわざわざされた非科学的な見方と言わねばならぬ」といい、また田島（1973：40、1993：95）は「ヨーロッパ人の無知・無理解からきた誤解」ときびしく批判している。われわれが注目すべき概念化、抽象化にみられる、普遍的なものとしての合理性は、表面的なものについてではなく、あくまで「能力の働く過程」に関するものだったはずである。一国語をすでに習得したものが、また他の国語を学習できるということに見られる能力をあげて説明したのは、表面にでてきた違いなどについて言っているのでは

なく、言語行為としてあらわれるまでの能力、ないしはその働き方の共通性だったのである。ある対象をAとして、非Aと区別し、Aと認識するような能力についてだったのである。<sup>(18)</sup>

#### 4. 「平衡回復」

4.1 Chomsky の文法理論は、今までのべてきたところと一致する面が多く、それなりの普遍性、論理性をもっているものであると言える。Descartes は、その能力こそ、機械にも動物にもない、人間本来のものであるというわけであるが、これが心理学でいう readiness、preparedness に関わるものである。人間の言語の起源については、いろいろな説があげられているが、それらはいずれも外的な要因から説明したものであって、なによりもまず、当の人間に、この能力が備わっていなければならない。人間のもつこの readiness, preparedness、すなわち、人間の側の能力が備わり、「用意が出来ている状態」こそ人間を特徴づけるはずのものである。Lenneberg (1964 : 589, 590) が、

「人間にはすべて自動的に言語へと発展していくような型の行動に対する内的な性質を与えられている……この性質は非常に深いものであるから、言語的な行動は末梢神経、中枢神経がおかされている場合でさえ発展していくものである……これこそ人間の言葉に対する preparedness、ことばの現象に対する普遍性への preparedness の程度を示す以外のなにものでもない」

と言うとき、これは Descartes とはつきり一致することに、むしろ驚かされる。これが、この能力は人間に本質的なものであることを明らかにできたと思う。

4.2 人間の主体性と結びついて、創造力となるこの能力について、その性質を心理学、論理的な面からみてきたが、この「生得的」なことについてさらに検討することにしよう。結論的には、「きわめて複雑な、しかも、同時的に行なわ

れる区別や統合は条件反射によって習得されるものであるより、むしろ胚 (embryo) における生物学的な発展を思い起させるものである」(Postal 1967 : 72) ということになるであろう。すなわち、この能力は実は、人間の能力といわれるまえにすでに動物の胚のころから備えもっているものであるわけである。(この点は Chomsky の「生得的」というところとはっきり一致する。) その能力が他の動物とちがう発達しかたをしたというところに人間の能力として区別される意味があるのである。しかし、生物がもつ本源的なものから発している点については違いがないのであって、オートマンの理論でも、脳の働きの解明と関連して問題にされる。オートマンの理論とは、一般に機械、生物体、社会機構に関係なく、他から資料としての情報を受け取って、自動的に処理し、その結果を自らの働きに反映していく機構についての理論であるが、これを適用すると、言語作用を含むような複雑な思考を行なっているときは、大脳における既成のオートマン閉回路に実際にパルスが流れていき、その結果次第に新しい回路ができていくという。また、われわれは、先天的に完成した多くの閉回路をもって生まれてきているのであって、これが普通、本能とか無条件反射と呼ばれるものにあたり、この生来の回路から順次に学習をかさねることによって、新しい回路をつぎつぎに完成し、賦活していく、これが「経験」だというわけである。それは「先天的に与えられた能力から出発し、それに新しい回路を順次につけ加えていくという仕方得られる」(坂本 1949 : 172, 173) とする。つまり、生得的とされる能力は、実は、胚のころのきわめて本源的なものを基礎にして発展してきたものなのである。

この能力は、また、いま触れたような、きわめて次元のひくい段階でも成立するものであり、どんなに知能がひくくても生得的・普遍的に言語能力をもっている理由はこれでも明らかになる。とくに、後半の「先天的に与えられた能力から出発し、そおれに新しい回路を順次につけ加えていく」という表現などは、すでに見た Chomsky のいうところと同等のものであるとって間違いない。Chomsky において、神秘とされていた創造力のもとたる生得的な言語能力とその働きは、ここで明らかになったとってよいであろう。

4.3 一度出た結果をふたたび一つの情報としてかえすというフィードバックは、現実には、全体として平衡をもとめるときの「揺れ」(oscillation)として把握される。<sup>(19)</sup>たとえば、平衡をとりもどす運動、問題解決は決して一直線に可能な最良の方向に向かうわけではない。そこには常にいくばくかの「揺れ」がみとめられる。この「揺れ」の過程こそ、弁証法によってとらえられようとしたものである、と見て、

「ヘーゲルが観念論によってとらえようとしているところのものは……フィードバックのある行動機能とよく似ている、とし、絶対精神というそれ自身のフィードバック系を有する人間精神の比喩的な全体は内的原因によるにせよ、常に一つの方向と逆の方向との極限の間を揺れながら、その間に与えられた情報によって自己を充たし、自己の平衡を維持していく」(坂本 1965 : 139, 142)

というとき、これは、またべつの面から、思考と言語の性格を明らかにしている。思考は内的対話であると言われるが、この対話(dialogue)はその語源において、弁証法(dialectic)とおなじ  $\delta\iota\alpha$  (between) +  $\lambda\epsilon\gamma\epsilon\iota\nu$  (to talk) をふくんでいることも関係ないとはいえない。また、純哲学的、論理的な方面からみても、「矛盾は古い形態のうちに成熟した新しい内容を基礎として、新しい内容にふさわしい形態を創造することによって克服される」(松村 1951 : 21) という言葉等も、弁証法と創造の関連を述べたものと受け取ってよい。

これは、当然人間が生命維持(これも一つの平衡状態)のためにさまざまな情報を集め、それを処理していかなければならないことを考えても、人間の行動も例外ではありえない。むしろ、その一行動としての言語活動についても言えることは、すでにみてきたことから明らかである。

人間の行動を支配するものは、同時に、その一部である言語をも支配しているはずのものであろう。人間から切り離されたものとしてではなく、真に人間の学としての、また普遍的なものとしての言語の理論は、生得的な言語能力の



働き方、その規則性に求められるべきものであり、そこにはじめて主体性と論理性に基づく創造的な理論がたてられるのではなからうか。

## 5. まとめ

以上、さまざまな点から、創造性について、それを、資料としての情報を分析、総合、推理によって平衡回復、あるいは問題解決へ至ろうとする主体的な働きとすべきであること、統一科学的な立場からも対象になり得るとのべた。心理的な面と論理的な面は、以上指摘してきたように、これは表面にでてきた形にたいして言われることであって、そこに至るときの人間の生来的な共通の能力の働き方、その過程の規則性は論理的なものであることは見てきたとおりである。問題の多くは、文がつくられる過程の規則性と、表面にあらわれたときの規則性との混同から起こるように思われる。この過程にみられる規則性こそ、概念構成にみられ、また Descartes が、「ことばを組み合わせて」というときの、その「組み合わせ」のなかに見られるはずのものである。従って、言語理論に本当の「普遍的」なものがあるとすれば、すでに形に表れたものについてではなくて、まさに人間共通の「普遍的な道具」(un instrument universel)としての能力の働き方に関するものであるはずで、これがあってはじめて、単なる表面に出た形から統計的な共通点の集積としてではない「一般文法」(grammaire générale)が成立し得よう。ここにこそ、Postal のいう言語理論に最低必要なものとしての「機械的手順」(mechanical procedure) (Postal : 1967 : 3) も成り立つはずである。Chomsky が「文法は言語能力の説明である」と言ったときの「説明」とは、抽象的に言語能力を解説することではなくて、その「能力の働く過程の規則性」を明らかにすることでなければならない。もともと発話は表面に出た氷山の一角であり、そこに普遍性を見いだすことが困難であるとしても、「見えない部分にこそ一般原理が見出されるべき」(Osgood 1968 : 20) であり、しかも「現象の下の、より深いレベルに潜む普遍的な原理があり、それが人間の行動を規制している」(Casagrande 1966 : 290) とすれば、

言語を人間の行動の一部としてとらえることの正当さはここで証明されよう。かくして、われわれは、普遍性をもつ生得的な能力、論理性、くわえて主体性、創造性、思考、言語を人間行動全体の中に位置付けることができたことになる。

このように、言語を情報と制御によって、平衡回復する人間の一行動として位置付け、説明を試みることは大きな過ちではあるまい。すでに見てきたように、さまざまな情報をもとに、それを処理しながら、精神的均衡を取り戻そうとする行動が思考であり、言語行動であり、また、この連続が、他の動物から区別される創造的な人間としての唯一の生存のありかたであるはずである。「デカルトの問題」、つまり、言語の創造性の問題は、まさしく、「日常生活における言語の普通の使い方」(Chomsky 1982: 139) に現われているのである。

### 第3章 結論

0. 第1章では gestalt 心理学の点から、いくつかの文法規則を見なおし、それが、「よい gestalt の要因にある程度添うものである」ことをみた。また、第2章では、「有限の規則の無限の使用」で具現される Chomsky の「創造性」は、結局、人間であること、生きることそのものに関わると考えるものであることをみた。ここでは、この二つの点について、いくつかの検討をくわえ、そのあと、全体のまとめをしたい。

1. すでに、第1章では、変形生成文法のいくつかの文法規則を gestalt 心理学の観点から検討し、それが、gestalt 心理学の「要因」をある程度満足させるものであることをみた。

Fries (1964) は、文の言語的意味は、語彙的意味 (lexical meaning) と構造的意味 (structural meaning) からなるとしたことからすれば、Chomsky が、Colorless green ideassleep furiously. は意味的に許容されないが、文法的であることから、これを出発点とし、自分の文法を「自律的統語論」(autonomous syntax) とした。これは、語彙的意味より、構造的意味に比重をかけた見方をしたことになる。文を構成する語は、文のなかで、その位置によって機能を与えられるのであるから、その見方はそれなりの正当性をもってる。しかし、場合によっては、語の意味の違いが、その文を許容するかどうかの重要な違いをおこすことがあるはずである。具体例でみることにしよう。

#### 1.1 第1章の後半でみた、

What did you V ((to) them) that he had done?

において、V の位置に、say、tell、report など許容されるが、grunt、murmer、

mumbleなどは問題ぶくみ (questionable) であり、purr、snarl、editorialize は許容されない、という重要な問題がおこることを見た。これはまさしく意味の問題であって、統語の問題ではない。これに対して、すでに見たように、統語の方からは、その理由が「はっきりしない」(unclear)などというのは、まさしく「自律的統語論」の限界である。

たとえば、snarl は 'to speak or say something in a nasty angry way' (Longman) とある。snarl は speak などと違い、単なる「伝達動詞」ではなく 'in a nasty angry way' とあるように「伝達の仕方」、つまり伝達動詞以上の情報をふくんでいる。この意味のちがいが、それぞれの動詞が許容されるか、されないかをきめているのである。これをすべて統語的に解決しようとすることは無理である。このことは、べつの例でも明らかになる。

いわゆる「指定主語制約」(SSC: Specified Subject Constraint) にも、全くおなじことをみることができる。「指定的」(specific) というのは、すでに「段階的な」形容詞であるものであり、また、

「SSCの問題は、NP内の要素とNP外の要素との関係の問題ではなく、情報構造として、どこが意味的に優位になっているか、主張になっているか、にかかわる、その文の主張部分と「指定主語」との問題である」

(葛西 1998 b : 68)

ところから、これは明白に意味に関わる問題である。統語論では、どうしても、中間のない「あれか、これか」の方が議論がしやすい。つまり、いわゆる「二分法のドグマ」(池上 1969 : 78-80) に陥りやすい。ここから新たな問題がおこる。<sup>(1)</sup>

中右 (1994 : 10, 11) が、

「統語論はいわゆる最近の GB (統卒・束縛) 理論ほどに抽象度の高いものである必要はなく、……統語論が本来の領分を超えて余分なものを取りこみす

ぎている」

といているのは、変形生成文法が、意味が決定的に関わる部分まで、統語論で解決しようとしたところに原因があろう。

1.2 変形生成文法にかぎっても、つぎにみるように、「格文法」、「生成意味論」などうまれ、そのあと、それらの理論は、Chomsky の理論にくらべて、全体的な説明力に欠けるとして、事実上「絶命」するほど徹底的に反論された。しかし、「格文法」で説明しようとした

1. a John opened the door with the key.
- b The door opened with the key.
- c The key opened the door.

これら (1 a, b, c) の文の間関係は否定するべくもない。しかし、これらの関係を「変形生成文法」で説明できないのは、明らかな事実である。また、

2. a John went to school.
  - b Mary went to school.
  - c John and Mary went to school.
- 
3. a John opened the door.
  - b The key opened the door.
  - c \*John and the key opened the door.

(2 a, b) から、(2 c) はできるが、(3 a, b) から、(3 c) をつくることはできない。等位構造をつくるときには、「格」のおなじものしか、等位接続できないのである。これも大きな発見である。<sup>(2)</sup>

また、

4. a He killed the man.  
b He caused the man to die.
5. a He almost killed the man.  
b He caused the man to become dead.

(4 a. b) の関連性は明らかであるが、このことから、(5 a) の意味の曖昧性を、(5 a) の almost は、(5 b) の、cause、become、dead のそれぞれにかかるとして解釈することによって解決しようとした「生成意味論」の視点も十分に評価できるものであろう。いわゆる「認知言語学」は、明白に生成意味論のながれをつぐものであることは明らかである。<sup>(3)</sup>

結局、重要なのは、

①どのような根拠で、②どんな理論をたて、また、③その理論によれば、いままでの理論で解決できなかった問題がどのように解決でき、④どんな問題がのこるか

を、はっきりさせておくことであろう。

トップ・ダウンである「変形生成文法」では、上でみたような、認識的にも妥当と思われるいくつかの統語的な「制約」があり、それぞれは、英語のもつ基本的な性格にも合致してもいる。一つの機能をはたす要素は、つよく「閉じた」まとまりをつくり、そのまとまりは、また(すでにみたように)「知覚」のうえでも、一つのまとまりをなすことをみた。しかし、統語的に問題がなくても、語の意味の違いが、その文の許容度をきめることはあることも、また事実である。

また一方、

「母親から繰り返し与えられる言語データ（motherese）や子供をかこむ言語共同体から与えられる言語データは、その頻度と情報の余剰性からみて豊かな情報源となっているという事実を考慮する必要がある。……生成文法の「刺激の貧困」の仮説は、この種の豊かな情報源を考慮していない」

（山梨 2000：260）

として、これと反対の立場をとる、ボトム・アップの方法には、それなりの理由があり、研究が進んでいる。これは、いわば、上でみた、言語的意味は、語彙的意味と構造的意味からなるとする考えからすれば、語彙の方から入ったことになる。この立場でも、いずれはトップ・ダウンの方法で、出発点とした、統語論の部分の説明が必要となる。「人間の認知能力にかかわる要因を言語現象の記述・説明の基盤とするアプローチをとる」（山梨 2002：251）。これにより、「言葉の背後に存在する言語主体の認知能力との関連で、言語現象を包括的に捉え直していく方向がみえてくる」とし、

「このことは、決して言葉の形式・構造の側面を軽視することを意味するわけではない。むしろ、形式・構造にかかわる制約も、根源的に言語主体の認知能力や運用能力にかかわる制約によって動機づけられているという視点に立つことを意味する」

（山梨 1998：251）<sup>(4)</sup>

という。ボトム・アップの方法による「統語論」、「統語制約」などの成果がまたれる。文の意味には、「構文」などは、構造を考慮しなくてはならないということの端的な表れであるが、これはいかにもトップ・ダウン「的」なところがある。いずれ、上にあげた①～④の点から、判断する必要がある。「トップ・ダウン」、「ボトム・アップ」のいずれかで、すべての問題が解決できるという前提はないのであるから。

2. 第2章では、「創造性」(creativity)についてみた。ここで、とくに重要な

ことは、表現しようとする表現内容を、ことばを「組み合わせる」表現しようとするとき、それは、ある解決すべき問題をあたえられ、その解決のために、もしまえのあらゆる手段をつかってその解決にあたる、という過程と同様のものであるということである。つまり、ことばの「創造性」とは、いわゆる「問題解決」(problem solving) そのものであることが指摘できる。

また、問題解決の一連の過程は、生物であれ、ある機能体が、なんらかの理由で、平衡状態を失ったとき、どうかしてその「平衡状態」(homeostasis) と取り戻そうとする働きそのものである。つまり、話し手に、なにか表現しようとする場合、話し手は、できる範囲の手段を講じて、それを表現しようとし、それが満足できるような形で、表現された時はじめて、表現しようとした意図が充たされて、心理的な平衡状態をとりもどすことができる、というわけである。

さらに、重要なことは、日毎に、いままで経験したことがないような状態におかれ、瞬時に、それを解決しながら、生きているのが現実の人間であることからすると、「創造性」は、単にそれとして、つまり、今までにない新しい表現を生み出す、というそれだけのことでなくて、人間が、人間として存在し続けるという、まさにそのことに直結するものである、ということである。言語人間固有のものである、とはいふふられているが、言語の「創造性」は、創造性一般をとおして、まさに人間として生存すること、そのものに関わる、ということができよう。

### 3. まとめ

本稿では、まず、けじめがはっきりしないまま立ち消えてしまい、「思惟の経済」の点でも無駄が多いとのべた丸山(1961)の「日本の思想」の問題点にふれ、これが英語学の世界でも同様であり、一つの理論の出発点から、その到達点、説明できない点が整理されないまま消えていくために、研究成果が積みあがらないのではないかということのをのべた。そういう理由から、ある言語理論



のなりたち、研究成果、またその説明不十分な点をはっきり確認することがなされるべきである、と考へ、①「革命的」とされている「変形生成文法」のもろもろの規則を gestalt 心理学から見なおすこと、もう一つは、②この理論の根底にある「創造性」をどう位置付け、評価するか、という二つの点を検討してきた。

その結果、①の、変形生成文法のもろもろの規則は、認識的にも十分正当性をもつものであることを確認できることをのべた。問題は、意味の問題であることが確実な現象をも、いわゆる「トップ・ダウン」の統語的な方法で解決しようとしているために、いかにも、無理で、不自然な説明がなされる場合があることをみた。すでに見てきたように、規則は簡潔でなければならない。不自然に複雑な方法にこだわるより、意味による無理のない、より簡潔な方法をさぐるべきである。そして、統語的な「制約」を、こんどは語の意味の面から「ボトム・アップ」に説明する方法をさぐるべきである。「語」のくみ合わせからはじめるミニマリストの方法に注目したい。それが成果をみせる前に、すでになわっている統語的な「制約」のすべてを廃棄する必要はない。

また、②の「創造性」を理論の根底にすえたことは、画期的であり、この理論のもっとも大きな特色である。これが具体的には、有限な規則を繰り返し使うという言い方にも見られるが、「創造性」をもちこんだことのさらに大きな意味は、「創造」というキーワードとし、これを「問題解決」、「平衡回復」などを通して、言語というものを、はっきり人間のもっとも特徴的なものとして位置づけたことであろう。言語は人間を特徴づけるものであるが、これを文法理論のなかにはっきり、このような形でくみこませたのは、ほかに例がない。これから生まれるであろう言語理論に、こういう意味での「創造性」がくみこまれるか、くみこまれないかによって、その言語理論が、本当の意味で、人間固有の言語を重視しているか、どうかを示す試金石になるはずである。

\* 本稿は、葛西 (1969)、葛西 (1994)、葛西 (1998 a) にもとづくものである。葛西 (1994) は北海道大学大学院、札幌大学大学院での講義原稿、葛西 (1998 a) は北海道教育大学 (函館) での集中講義原稿である。葛西 (1969) が書かれたのは、35 年も以前であり、講義原稿とは間があるが、講義原稿とともに著者の、言語にたいする基本的な姿勢を表しているの、個別的なテーマで書かれた他の論文の根底にある考えを表すものとして、まとめておくことにも意味がある、と考えた。講義原稿のほうはほとんど変更はないが、葛西 (1969) は読みやすさを念頭にして、原形をとどめないほど書きなおした。

## 注

### 序 章

(1) つぎの、田中 (克) (2004: 123-4) の、「日本にかぎらず思想的、精神的な後進国では、みずからは思考せず、新しい流行が現われるやいなやその信者となるという風土にあっては、新しい理念や思想はどこかに天才があらあわれると、そこをめぐって、まるで空虚から降ってくるように思われているふしがある」ということばは、言語学についてのべたものだが、日本のどの分野にもあてはまりそうである。いま、科学が、「対象になる現象を注意深く観察し、その中から一般性を抽出し、ある程度の一般性をもつ複数の特徴・命題を結合させて、より一般性の高い命題を得ようとする」ものであり、「科学的というのは、普遍的な客観性をもつということである。といっても何もむつかしいことではなく、特定な人でなく、誰にも分かるという意味である」(中谷 2002: 205) とするならば、「ときには意識的に外のことに知らん顔するのも大切なことではないだろうか」(朝永 2000: 257) となるであろう。

### 第 1 章

(1) この理論がでたときには、この gnosteme という用語には、定訳がなかったが、その後、出版された『新英語学辞典』(研究社) では「知解素」となって

いる。ちなみに、gnosteme の gnos- (<L. gnoscere) は「認識する」という意味である。

- (2) この二分節と、あとでみる「創造性」との関係については、加賀野井(2004: 131-2) を参照。
- (3) ただし、これには、John promised Mary [PRO to go] という例外がある。
- (4) また、これをさまたげる現象もある。「長距離照応現象」

i They<sub>i</sub> saw [NP pictures of each other<sub>i</sub>]

この文で、each other は (pictures よりも遠い) they と照応している。この場合、each other は焦点になっており、NP 内では pictures よりも意味的に優位である。そのため、この文のテーマである they と照応するものと思われる。この現象は、主語だけにおこる、というのも、その証拠になろう。

ii They<sub>i</sub> told us<sub>j</sub> [that [pictures of each other<sub>i</sub>/\*<sub>j</sub> would be on sale]]

- (5) ここに、あとでのべる「袋小路」(garden path) 文にふれてもよいであろう。
- (6) Chomsky (1973: 236 note 12) に 'Recall that although transformations are independent of grammatical or semantic relations, they do, of course, reflect properties of lexical items and lexical categories' (下線引用者) とあることに注目したい。

## 第2章

- (1) 「チョムスキーが〈作り出す〉(produce) という語を使用したのは適切ではない。この言葉を使うと、どうしても言語の文法構造で聞き手ではなく、話し手の立場から記述になってしまう。文法はことばの了解活動ではなく、発

話（産出活動）を記述するものだと言うふうにとられてしまう」（Lyons 1974：43）も参考になる。

(2) 「この生成と訳される generate という語がフンボルトのドイツ語 *erzeugen* に直接由来することは言うまでもない」（田中(克) 1992：105）、つぎの注(3)も参照。

(3) Chomsky (1965：9) には “‘generative’ seems to be the most appropriate translation for Humboldt’s *erzeugen*’ という言葉がある。

(4) 「言語の創造的使用……本質的特徴」（Chomsky 1979：80）、‘*l’utilisation créative du langage comme une caractéristique essentielle*’ (1977：73)、  
「言語は……本来的に創造的である」（Humboldt 岡田 1984：72）、「彼（＝Chomsky）の言語学に対する最大の功績は言語の創造性を話し手・聞き手の言語活動を言語研究の中心課題にすえたこと、及び、それを厳密に明示的な形で表現するための理論装置を構築しようとしたことである」（Lyons 長谷川（解説） 1985：232）

(5) 「いかなる言語をとってみても、論理法則は概してすべてに通用する」（坂本 1949：172）、「言語記述と一般言語理論は、心理学固有の領域に属するというよりもむしろ認識異論の領域に属すると考える方が当を得ていると思う」（Katz 1971：96）、「言語は「人間の心理学の一部」（Chomsky 1979：52）なども参照。

(6) ‘he could hardly have made the technical advances he did make in linguistics, if the ground had not been prepared for him by such scholars as Harris.’ (Lyons 1974：35) は、Chomsky と Harris の関係をよく表している。

(7) この「創造性」（いわゆる「デカルトの問題」）と Humboldt のつながりについては後でみる。

(8) 谷川（2003：130）も参照。

(9) ‘this creative command of language is unique to human beings: it is species-specific’ (Lyons 1977：25)（下線引用者）と、これは人間固有のも

のであることをのべている。

- (10) 亀山 (1978 : 261) にも、Humboldt への同じ趣旨の言及がある。
- (11) 「自らの着想を根拠づけるために、あとでそれを利用したのである」(田中(克) 1990 : 86) も同じ趣旨のものである。
- (12) (Chomsky 1966 : 41) にも類似の表現がある。
- (13) 葛西 (1972) を参照。
- (14) Saussure (1972 : 177) には 'Le tout vaut par ses parties, les parties valent aussi en vertu de leur place dans le tout, et voilà pourquoi le rapport syntagmatique de la partie au tout est aussi important que celui des parties entre elles' という表現がある。
- (15) 'degrees of subjective creativity are characteristic of problem solvers.' (D' Agostine 1986 : 174)、'creativity is manifested in problem-solving' (D' Agonistine 1986 : 170-1) (下線引用者)、「思考は本質的には人間が直面している問題または課題の解決としてもたらすところの認識である」(ルビンシュテイン 1962 : 19)、「思考作用とは、有意的な、知的な課題解決過程程である」(矢田部 1967 : 315)、「思考課程は思考者の精神的平衡状態が破られることによって触発される」(矢田部 1967 : 382) など参照。
- (16) 「精神に三つの作用があり、それは認識、判断、推理である」(Rietsch 1992 : 34)
- (17) 葛西 (1970) を参照。
- (18) 「「同じものが同時に、そして同じ事情のもとで、同じものに属し且つ属しないということは不可能である」という原理である」。(アリストテレス『形而上学』(上) p.122) を思い出してよい。さらに、この矛盾律は、「あらゆる分析的認識の普遍的でかつ十分な原理」であり、「いかなる認識もこの原理に反することはできない」(カント p.227) も参照。
- (19) ピアジェ (Piaget) (2004) は、子供の精神発達を「均衡への歩み」の課程として説明したものであるが、人間が生きていくのも基本的には、欲求をみだし、精神的均衡をとりもどそうとする動きの連続と考えることができよう。

なお、Piaget (2004:13) によれば「欲求とは、常に、不均衡のあらわれ」である。

### 第3章

- (1) 「二値的なパラメーター方式による諸言語の特質を yes or no の形で裁断してしまい、more or less の実態を記述できない」(児玉 1987:130)とか、「現代論理学が、論理を真と偽という二値論理としたところに意味をせまく捉えることになってしまった原因がある」(沢田 1967:47)、さらに「このような二分法的な発想法、対決法は……は非連続区的カテゴリーで人為的に区分してしまう絶対主義の誤謬をおかしている」も参考になる。ほかに葛西(1972)も参照。
- (2) しかし、「格」の認定基準、とその数について疑問をのこすことになったのは、この理論の弱点である。
- (3) これは山梨(2000:254)の「認知言語学の基本的な考え方は、生成意味異論の基本的な考え方の発展的な継承とみることができる」ということばにもみることができる。
- (4) 山梨(2000:250)にまったく字句のおなじ表現がある。

### 参考文献

- Alston, W.P. 1964. Philosophy of Language [村上訳『ことばの哲学』1968. 培風館]
- 碧海ほか(編) 1966. 『科学時代の哲学』培風館
- アリストテレス 1973. 藤沢訳「詩学」『世界の名著』8 中央公論社
- アリストテレス 2004. 出訳『形而上学』(上) 岩波書店
- 東・大山(監修) 1984. 『認知と心理学』認知心理学講座』東大出版会
- Bach, E. 1968. 'Nouns and noun phrases' Universals in Linguistic Theory  
Bach and Harms (eds.) Holt, Rinehart and Winston

- Bach, E. and R.T. Harms. 1968. Universals in Linguistic Theory Holt-Rinehart
- Bolinger, D. 1978. 'Asking more than one thing at a time' Questions Hiz, J. et al. (eds.) Reidel Pub. Company
- Borkin, A.M.H. 1975. Raising to Object Position Univ. of Michigan Press
- Brown, R.L. 1967. Wilhelm von Humboldt's Conception of Linguistic Reality Mouton
- Bruhl, L. (ブリュール). 山田訳『未開人の思惟』(上、下) 1966. 岩波書店
- Bühler, K. (ビュラー) 脇坂ほか訳『言語理論』(上) 1983. クロノス
- Carrol, J.J. 1964. Language and Thought Prentice-Hall [詫摩訳『言語と思考』岩波書店
- Casagrande, J.B. 1966. 'Language universals and anthropology' Universals of Human Language Greenberg (ed.) MIT Press
- Cassirer, E. (カッシーラー) 生松訳『象徴形式の哲学 第一巻 言語』1972. 竹内書店
- Celce-Murcia, M. and D. Larson-Freeman 1983. The Grammar Book Newbury House Publishers, Inc.
- Chaplin, J.P. 1968. Dictionary of Psychology A Laurel Original
- Chomsky, N. 1957. Syntactic Structure Mouton
- Chomsky, N. 1964. 'Current issues in linguistic theories' The Structure of English Prentice-Hall
- Chomsky, N. 1964. 'Transformational approach to syntax' The Structure of English Prentice-Hall
- Chomsky, N. 1964. 'On the notion "Rule of Grammar"' The Structure of English Prentice-Hall
- Chomsky, N. 1965. Aspects of the Theory of Syntax MIT [安井訳『文法理論の諸相』1970. 研究社]
- Chomsky, N. 1966. Cartesian Linguistics Harper & Row [川本訳『デカルト

- 言語学』1976. みすず書房]
- Chomsky, N. 1966. Topics in the theory of Generative Grammar Mouton
- Chomsky, N. 1971. Problems of Knowledge and Freedom Random House  
[川本訳『知識と自由』1975. 番町書房]
- Chomsky, N. 1972. Language and Mind Harcourt [川本訳『言語と精神』  
1980. 河出書房新社]
- Chomsky, N. 1973. 'Conditions on transformations' S.R. Anderson and P.  
Kiparsky(eds.) A Festschrift for Marris Halle 1973. Holt, Rinehart and  
Winston, Inc. 232-286
- Chomsky, N. 1975. Reflections on Language [井上ほか訳『言語論』1979.  
大修館書店] [Réflexions sur le Langage trans. by J. Milner 1977.  
Flammarion]
- Chomsky, N. 1977. 'On wh-movement' Formal Syntax Culicover et al. (eds.)  
Academic Press
- Chomsky, N. 1980. Rules and Representation Columbia Univ. Press [井上ほ  
か訳『ことばと認識』1984. 大修館書店]
- Chomsky, N. 1982. The Generative Enterprise Mouton [福井ほか訳『生成文  
法の企て』2003. 岩波書店]
- Chomsky, N. 1987. Language in a Psychological Setting Sophia Univ. [加藤  
ほか訳『言語と認知』1994. 秀英書房]
- Chomsky, N. 1988a. Generative Grammar Kyoto University of Foreign  
Studies
- Chomsky, N. 1988b. Language and Problems of Knowledge MIT Press [田  
窪ほか訳『言語と知識』1991. 産業図書]
- Chomsky, N. 1990. 'Some notes on economy of derivation and representa-  
tion' 内田訳「派生と表示の経済性に関する覚え書き」『認知科学の発展』
- Chomsky, N. 1994. Language and Thought The Frick Collection [大石訳  
『言語と思考』1999. 松柏社]



- Culler, J. 2002. Saussure Fontana Press [川本訳『ソシユール』岩波書店]
- D'Agostino, F. 1986. Chomsky's System of Ideas Oxford Univ. Press
- Declerck, R. 1991. A Comprehensive Descriptive Grammar of English  
Kaitakusha
- Descartes, R. (デカルト) 1968. Discours de la Méthode. Libraire Hachette  
[野田訳「方法序説」『世界の名著』22.161-222 中央公論社]
- Descartes, R. (デカルト) 1968. 井上・森沢訳「省察」『世界の名著』22.223-307  
中央公論社
- Descartes, R. (デカルト) 1968. 井上・水野訳「哲学の原理」『世界の名著』  
22.309-408 中央公論社
- Dufernne, M. (デュフレンヌ) 長谷川訳『言語と哲学』1979. せりか書房
- Erteschick-Shir, N. 1977. On the Nature of Island Constraint Doctoral Diss.
- Fries, C.C. 1959. The Structure of English Longmans
- Fries, C.C. 1964. American English Grammar Maruzen Pub. Company
- 藤永 保 1971. 『現代心理学』筑摩書房
- 藤永・森岡 1972. 『言語と人間』東京大学出版会
- 福井勝義 1991. 『認識と文化』東京大学出版会
- 福井直樹 2001. 『自然科学としての言語学』大修館書店
- Gadet, F. (ガデ) 立川訳『ソシユール言語学入門』1995. 新曜社
- Gardner, H. (ガードナー) 1987. 佐伯ほか訳『認知革命』産業図書
- Gilson, E. (ジルソン) 1974. 河野訳『言語学と哲学』岩波書店
- Greenberg, J.(ed.)1966. Universals of Language MIT Press
- Grosu, A. 1972. The Strategic Content of Island Constraint Working Papers  
in Linguistics Ohio State's Univ.
- Guillaume, P. (ギヨーム) 八木訳『ゲシュタルト心理学』1966. 岩波書店
- Hacking, I. (ハッキング) 1975. Why does Language Matter to Philosophy?  
[伊藤訳『言語はなぜ哲学の問題になるのか』2002. 勁草書房]
- Hagège, C. 1976. La grammaire générative: réflexions critiques Presses

universitaires de France

- Haiman, J. 1984. 'Iconic and economic motivation' Lg. 60: 781-819
- 波多野・沢田 (編) 1965. 『現代の言語心理学』 牧書房
- 服部四郎ほか (編) 1968. 『岩波講座 哲学 言語』 岩波書店
- Heintel, E. (ハインテル) 磯江・下村訳 『言語哲学の根本問題』 晃洋書店
- Hertzler, O. (ヘルツラー). A Sociology of Language Random House
- Higgins, F.R. 1974. 'On J. Emonds's analysis of extraposition' Syntax and Semantics 2: 149-195
- 平林幹郎 1993. 『サピアの言語論』 勁草書房
- 広松 渉 1979. 『もの・こと・ことば』 勁草書房
- 広松 渉 1982 『存在と意味』 岩波書店
- Hockett, C.F. 1949. 'Problems of universals in language' Lg. 23: 325-43
- Hook, S. (フック) 三宅ほか訳 『言語と思想』 1994. 研究社
- Horn, L.R. 1978. 'Remarks on neg-raising' Syntax and Semantics 9: 129-220
- 細江逸記 1917. 『英文法汎論』 泰文堂
- Humboldt, W.v. 1998. Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues Schoeningh [岡田訳 『人間と言語』 1948. 創元社]、[亀山訳 『言語と精神』 1984. 法政大学出版局] [Linguistic Variability & Intellectual Development translated by C.C. Buck and F.A. Raven 1971, Univ. of pennsylvania Press]
- Humboldt, W.v. ルーメルほか訳 『人間形成と言語』 1989. 以文社
- Husserl, E. (フッサール) 水地訳 「厳密な学としての哲学」 『世界の名著』 51: 102-171 1970. 中央公論社
- Husserl, E. (フッサール) 小池訳 「デカルト的省察」 『世界の名著』 51: 173-353 1970. 中央公論社
- 池上謙二 1948. 『論理学』 日本評論社
- 今田 恵 1965. 『現代の心理学』 岩波書店
- 今井邦彦 (編) 1986. 『チョムスキー小辞典』 大修館書店

- 岩崎ほか 1968. 『現代の哲学入門』 有精堂
- 泉井久之助 1948. 『フンボルト』 弘文堂
- 泉井久之助 1967. 『言語の構造』 紀伊国屋書店
- 泉井久之助 1970. 『言語の世界』 筑摩書房
- 泉井久之助 1976. 『言語研究とフンボルト』 弘文堂
- Jackendoff, R. 1977. Semantic Interpretation in Generative Grammar MIT Press
- Jackendoff, R. 1993. Patterns in the Mind Harvester Wheatsheaf [水光訳 『心のパターン』 2004. 岩波書店]
- James, W. (ジェイムズ) 今田訳 『心理学』 (上、下) 1967. 岩波書店
- 加賀野井秀一 2004. 『ソシユール』 講談社選書
- 亀山健吉 1978. 『フンボルト』 中公新書
- 亀山健吉 2000. 『ことばと世界』 法政大学出版局
- Kant, I. (カント) 篠田訳 『純粹理性批判』 (上) 2003. 岩波書店
- 葛西清蔵 1969. 「言語における創造性」 『北海道教育大学紀要』 20-1 : 55-67
- 葛西清蔵 1970. 「一経験論者・ジョン・ロックの言語観」 『北海道教育大学紀要』 21-1 : 14-24
- 葛西清蔵 1972. 「チョムスキーの理論的背景について」 『函館英文学』 11 : 29-35
- 葛西清蔵 1994. 「認識と言語 よい gestalt と文法」 MS.
- 葛西清蔵 1998 a. 'Fair or Ugly?' MS.
- 葛西清蔵 1998 b. 『心的態度の英語学』 リーベル出版
- Katz, J. 1966. The Philosophy of Language Harper & Row [沢田 (監修) 西山訳 『言語と哲学』 1971. 大修館書店]
- 川本茂雄 1986. 『ことばとイメージ』 岩波書店
- 小林淳男 1976. 『言語の世界と思惟の世界』 開文社
- 児玉徳義 1987. 『語順の普遍性』 山口書房
- Koehler, W. (ケーラー) 相良訳 『心理学における力学説』 1965. 岩波書店
- 興水 実 1966. 『言語哲学』 明治図書

- 高山岩男 1942. 『哲学的人間論』 岩波書店
- 窪蘭ほか 1991. 『英語の発音と英詩の韻律』 英潮社
- 久野収・鶴見俊輔 1956. 『現代日本の思想』 岩波書店
- Kuno, S. 1974. 'Lexical and contextual meaning' LI. 5-3: 469-477
- Kuno, S. and J.J. Robinson 1979. 'Multiple Wh-questions' LI. 3: 463-487
- Lakoff, R. 1979. 'Linguistic gestalt' CLS 13: 296-287
- Lamb, S.M. 1966. Outline of Stratificational Grammar Georgetown Univ. Press
- Lancelot, C. and Arnauld, A. (ランスロ・アルノ) Grammaire Générale et raisonnée [南館訳『ポール・ロワイヤル文法』1972. 大修館書店]
- Langacker, R.W. 1992. 'Space grammar, analysability, and the English passive' Lg. 58-1. 22-60
- Langer, S.K. (ランガー) 矢野ほか訳『シンボルの哲学』1966. 岩波書店
- Lenneberg, E.H. 1964. New Directions in the Study of Language MIT Press
- Lenneberg, E.H. 1984. 'The capacity for language acquisition' The Structure of English Prentice-Hall
- Locke, J. (ロック) 大槻春彦訳「人間知性論」『世界の名著』22:1968. 中央公論社
- Lockwood, D.G. 1972. Introduction to Stratificational Linguistics Harcourt
- Luria, A.R. (ルリア) 天野訳『言語と意識』1982. 金子書房
- Lyons, J. 1968. An Introduction to Theoretical Linguistics Cambridge Univ. Press [国広ほか訳『理論言語学』1973. 大修館書店]
- Lyons, J. 1977. Chomsky Fontana [長谷川ほか訳『チョムスキー』1985. 岩波書店]
- Maher, J. and J. Grove 1996. Introducing Chomsky Totem Books
- Martinet, A. 1962. A Functional View of Language Oxford Univ. Press [田中ほか訳『言語機能論』みすず書房]
- Martinet, A. 1967. Éléments de Linguistique Générale Librairie Armand Colin

- [三宅訳『一般言語学要理』1972. 岩波書店]
- 丸山圭三郎 1981. 『ソシユールの思想』岩波書店
- 丸山圭三郎 1983. 『ソシユールを読む』岩波書店
- 丸山真男 1961. 『日本の思想』岩波書店
- 松村一人 1951. 『弁証法とはどういうものか』岩波書店
- Miller, G.A. and P.N. Johnson Laird 1976. Language and Perception Harvard Univ. Press
- Milsark, G.L. 1979. Existential Sentences in English Garland
- 三浦つとむ 1967. 『認識と言語の理論』2 勁草書房
- 三浦つとむ 1972. 『認識と言語の理論』3 勁草書房
- 三浦つとむ 1977. 『言語学と記号学』勁草書房
- 三浦つとむ (編) 1981. 『現代言語学批判』勁草書房
- 宮崎・上野 1985. 『視点』東大出版
- Morris, C. (モリス) 寮訳『記号と言語と行動』三省堂書店
- Morton, J. (モートン) (編) 芳賀訳『心理言語学』1976. 研究社
- 永井・黒崎 1967. 『科学哲学概論』有信堂
- 中島文雄 1951. 『英語：文法と観賞』開文堂
- 中村克巳 1960. 『論理学と科学方法論』有斐堂
- 中村 悟 1999. 『言語は自然科学か』昭和堂
- 中村芳久 (編) 2004. 『認知文法 II』大修館書店
- 中右 実 1994. 『認知意味論の原理』大修館書店
- 中谷宇吉 2002. 『科学の方法』岩波書店
- Nidditch, P.H.(ed.)1991. John Locke An Essay concerning Human Understanding Oxford Univ. Press
- 認知科学会 (編) 1990. 『認知科学の発展』講談社
- 野上芳美 1987. 『脳と言語』岩波書店
- 野村泰幸 2004. 『プラトンと考える ことばの獲得』くろしお出版
- 小倉貞秀 1986. 『ブレンターノの哲学』以文社

- 奥村 宏 2004. 『判断力』 岩波書店
- Orwell, G. (オーウエル) 小野寺訳 『オーウエル評論集』 2004. 岩波書店
- 大森荘蔵 (編) 1984. 『講座 哲学 世界と知識』 東京大学出版会
- 大森荘蔵 1986. 『思考と論理』 放送大学教育振興会
- Osgood, C.E. 1968. 'Universals and psycholinguistics' Universals of Linguistic Theory Holt-Reinhart
- Piaget, J. (ピアジェ) 滝沢訳 『思考の心理学』 2004. みすず書房
- Postal, P. 1967. Constituent Structure Bloomington
- Quirk et al. 1985. A Comprehensive Grammar of the English Language Longman
- Reinhart, T. 1976. The Syntactic Domain of Anaphora MIT Doctoral Diss.
- Reinhart, T. 1984. 'Principles of gestalt preception in the temporal organization of narrative tests' Linguistics 22: 779-803
- Rietsch, P. (リーチ) 1972. 南館訳 『ポール・ロワイヤル文法』 大修館書店
- Ross, R. 1984. Intinite Syntax Ablex Publishing Corporation
- Rubinstein, S.L. (ルビンシュテイン) 石田訳 『思考心理学』 1962. 明治図書
- 齊藤 渉 2001. 『フンボルトの言語研究』 京都大学学術出版会
- 坂本百太 1949. 『言語・論理・計算器』 岩波書店
- 坂本百太 1972. 『ことばと哲学』 学文社
- 坂本百太 1986. 『心と身体』 岩波書店
- 坂野・天野 1976. 『言語心理学』 新読書社
- Sampson, G. 1970. Stratificational Grammar Mouton
- Sapir, E. 1949. Language Harcourt, Brace & World, Inc. [泉井訳 『言語』 1957. 紀伊国屋書店]
- Saussure, F. 1972. Cours Linguistique Générale Payot [小林訳 『言語学原論』 1942. 岩波書店] [小林訳 『一般言語学講義』 1972. 岩波書店]
- Saussure, F. (ソシュール) 前田訳・注 『ソシュール講義録注解』 1991. 法政大学出版局

- Saussure, F. (ソシュール) 相原ほか訳『一般言語学第三回講義』2003. エディット・パルク
- 沢田治美 1993. 『視点と主観性』 ひつじ書房
- 沢田允茂 1965. 『現代における哲学と論理』 岩波書店
- 沢田允茂 1966. 『現代論理学入門』 岩波書店
- 沢田允茂 1967. 『現代の論理学』 明治図書
- 沢田允茂 1969. 『知識の構造』 日本放送出版協会
- 沢田允茂 1989. 『言語と人間』 講談社
- Schachter, R. 1977. 'Constraints on coordination' Lg. 53-51: 86-103
- Schmerling, S.F. 1974. 'Contrastive stress and semantic relation' CLS 10: 608-16
- Searle, J.R. (ed.)1971. The Philosophy of Language Oxford Univ. Press
- Slobin, D.I. (スロービン) 1971. Psycholinguistics 「『言語心理学入門』 1975. 新潮社」
- Snell, B. (スネル) 新井訳『言語・詩学・哲学』 大修館書店
- 田島節夫 1973. 『言語と世界』 勁草書房
- 田島節夫 1993. 「現代の言語理論と哲学」『岩波講座 言語 哲学』65-97 岩波書店
- 高橋里美 1948. 『認識論』 岩波書店
- 滝沢武久 1967. 『ピアジェによる論理思考の構造』 明治図書
- 滝沢武久 (編) 1967. 『現代思考心理学 4 科学的思考』 明治図書
- Talmy, L. 1975. 'Figure and ground in complex sentences' Universals of Human Language 4: 625-649
- 田中克彦 1990. 『チョムスキー』 岩波書店
- 田中克彦 2004. 『ことばとは何か』 ちくま書房
- 田中美知太郎 (編) 1966. 『講座 哲学大系 3』 人文書院
- 田中美知太郎 (編) 1968. 『講座 哲学大系 2』 人文書院
- 田中茂範 1990. 『認知意味論』 三友社

- 谷川多佳子 2003. 『デカルト『方法序説』を読む』 岩波書店
- 丹治信春 2002. 『言語と認識』 勁草書房
- 朝永振一郎 2000. 『科学者の自由な楽園』 岩波書店
- Trabant, J. (トラバント) 村井訳 『フンボルトの言語思想』 2001. 平凡社
- 埋橋徳良 1986. 『言語論ノート』 勁草出版センター
- Vigotzky, L.S. 1965. Thought and Language tans. by Haufman, E. MIT Press
- Wallace, S. 1982. 'Figure and ground: the interrelationship of linguistic categories' Hopper, P.G. Tense-Aspect Carrol, B.(ed.) Benjamin
- 渡辺 慧 1978. 『認識とパターン』 岩波書店
- 渡辺 慧 1986. 『知るということ』 東大出版会
- Waismann, F. 1971. The Principles of Linguistic Philosophy Harre, R.(ed.) Papermac [ロボ・楠瀬訳 『言語哲学の原理』 1977. 大修館書店]
- Weisgerber, L. (ヴァイスゲルバー) 福本訳 『言語と精神形成』 1969. 講談社
- Whorf, B.L. 1956. Language, Thought and Reality (ed.)Carrol, B. MIT Press
- Wittgenstein, L. 1959. Tractatus logico-philosophicus Basil Blackwell [藤本ほか訳 『論理哲学論考』 1971. 法政大学出版局]
- Wittgenstein, L. 1973. Philosophische Grammatik Basil Blackwell [山本信訳 『哲学的文法1』 1975. 大修館書店]
- 山元一郎 1966. 『コトバと哲学』 岩波書店
- 山元一郎 1993. 「コトバと哲学」『岩波講座 哲学 言語』 1-63 岩波書店
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房
- 山梨正明 1998. 「認知言語学」玉村(編)『新しい日本語研究を学ぶ人のために』 251-76 世界思想社
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』 くろしお出版
- 山梨・有馬(編) 2003. 『現代言語学の潮流』 勁草書房
- 山内得立 1967. 『意味の形而上学』 岩波書店
- 山崎・市川(編) 1986. 『現代哲学辞典』 講談社



言語・認識・創造性（葛西清蔵）

柳瀬睦男 1984. 『科学の哲学』 岩波書店

矢田部達朗 1967. 『思考心理学』 II 培風館